女學雜誌

第三百三拾五號

乙の巻



明治二十六年
一月七日發兌

注意

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 335. JANUARY 7th. 1893.

本號（第三百三拾五號）目次

前週（第三百卅五號）白表

前々週（第三百卅四號）赤表

女學雜誌 第三百卅五號 明治二十六年一月七日發兌

社説

○年頭初感

歳更たまる時は、一陽來復して、天地に日光遍照する心地せられ、四面の光景言はん方なく快ちよし。此時に當りては、何人も樂天家となりぬべし。鶯未だ鳴かず、梅花未だ開かずと云へど、八方と、人心と、大率ね皆な陽春ならざるはなし。面を滋くし、苦く笑ひて、心浮立ざる可憐の人、何處にありや。

此等の世の有様を觀ずるときは、亦た喜びなきにあらず。小兒の樂し氣に群れ遊ぶを見るは、老翁の滿足する所ろなり。たとひ心裏、何等の深き憂ひあらん輩といへども、人の樂しむを見て、亦隨つて樂しむの情あらずとせんや。吾黨が新年を祝するは此の意ありてに由る。

加之、本年々頭の今日は、右の外に、更に一つの眞實なる喜こびあり。之を念ひ思ひて、感謝の心禁めがたく、前途に想望して、欣喜雀躍の心地せり。試みに問へ、樂事果して何事ぞと。

事は、去年々末に於ても一言したる、今歳に於ける女子教育界の望太はだ多きと、即はち是なり。彼の保守的反動は、一昨二十四年の秋、木の葉の落ち初むる頃より、稍やくにして衰ろへ、冬に至りて彌よ隱れ、昨年春に至りて、既に好望の曉となりぬ。吾黨は、此の曉を報じ、少さか眠を驚ろかすの役に使はれんとして社員一人、中國、四國、九州を歴行して言を宣ぶる所ありぬ。此事もとより差したる影響あらずとするも、大勢の向ふ所ろは、些々たる人力の得て防ぐ所ろにあらざるを以て、女子教育復興の傾向き猛然として推寄せ來りぬ。昨年夏後、關西の女學校の景況何如に多望となりしかを察せよ。

此の勢ひ彌よ進み、則はち亦本年の春とはなりぬ。考ふるに此の一年は目覺しき一年なるべし。而して、其の復興を善導し、女子教育の方針を正しふせしめて、再たび、西洋風、保守風の兩極に傾むかしめざるとに熱勉せずんばある可らず之れ、吾黨が、本年を預じめ祝すると共に、亦本年を大ひに

警戒する所以のもの也。

吾黨微力、大勢に向つて、何等の增減する所ろもなかるべし然れども、女子敎育の方針に對しては、年來多少の任免する所なきにあらず。密かに決す、中正の方針なるものは、蓋し此かと。則はち、此を墨守堅護して、玆に幾星霜を經たり。其主義の顯揚せられんとを希がひ、玆に幾春秋を送れり。而して、今や天地快明、吾黨の微力を憫れむの大勢正に近づくを感ず。之れ、大ひに祝し、大ひに戒しめ、謹嚴敬虔の念を以て、邦家斯道の爲めに、役僕とならんとするの決意更に彌よ固かる可きの時也。吾黨、年頭の初感に於て、先づ謹しみて此の念ひを定む。

希はくは、同志の諸君と共に、此一年を如此くにして、神聖に送らん。

○孤女學院獻堂式

明治二十五年十二月廿三日、東京王子村の孤女學院に於て、新築せる會堂、建增したる塾舍の爲に、獻堂式を執行なふ。監督ウイリアムス、式を主どり、且つ新堂聖成の祈禱を献ず。會する者數十名、此の結構落成の由來を聽聞して、感激する者多かりき。

其由來を報じたる人の言に由れば、建增したる塾舍に、塾三室、病舍一室、合計二十四坪（橫三間、竪八間）あり、此代價二百四圓、新築せる會堂、橫四間、竪五間にて、合計二十坪、此代價二百二十圓。大須賀君の爲の室二つ、疊、八と三とを敷き、合計六坪、此代價六十圓。

而して、建增したる塾舍の建築費二百四圓は、前年大須賀君が擲うちて人の手に渡し、當時の相場に對して正金を受取りたる或る株券の時價近日暴かに騰貴したりしかば、其人より此の超過の金を返附したるに由りて得られたり。會堂の新築費二百二十圓は、去年本誌に記載したる、彼の甲州市川の乙女が寄附したる種々の品物を賣却し、其厚意を長く紀念せんとて、小會堂建築の事を發企せられたる時、之を傳聞して寄附を申入れたる人少なしとせず、此等を合して則はち得たるものと云へり。大須賀君の爲の室なるものは、殊に有志者十數名の寄附によりて成りたり。其寄附帳の主意書の中に、左の如き文字ありときく、

孤女學院の景況は、女學雜誌が屢に記載せる如し、大須

賀君は、助力者に惣て定室を與へて自らは定りたる部屋を有せす、教場の片隅にて板間の上に机一脚を置き、授業后此に倚りて讀書する耳、夜は眠る所狹きが爲め、時としては、藥室内に伏すとあり、臭氣紛々素より堪ゆ可らす、他の助力者は見るに忍びず、强て其席を讓らんとすれ共、君の可かざるにより、君よりも更に不快なる處に眠らざる可らずとて、遂に風呂場の内に寢たるものあり。………万事如此なれば、此儘に放任するは大須賀君を殺すに均しく、大須賀君を殺すは、即はち孤女學院を倒すものなり、云々。

此主意にて、少數なる有志者が特別の寄附を爲せしにより落成したるもの也。大須賀君素より此設計を知らず、既に成れる頃ほひ、岡山孤兒院艱難の報知ありしかば、君いよ〳〵此室に入るを肯んぜざりしが、有志の人强ひて之を勸めたるにより、辛くも之を承引せられぬ。

此院創設以來未だ滿一歳に及ばず、而して恩寵を受けたるとの多き、眞とに常ならずとす。其創業の當時を知れる人、誰か之に喫驚し、信仰の力の偉大なるとを感佩せざるべき。今や、孤女四十名、月々の經費五六十圓、而も單に義捐の金によりて之れを維持することを得るものは、主動者の信仰と至誠との充つるが故のみ。此院將來の發達は、實に此の一點にあり、人間の細巧なる趣構は、決して此の大任に當るに足らざる也。

其新築せる建物は、悉く義捐金によりて成れり、而して、此成りたる者を、神に捧け、全く之を聖別せんとす。此精神の眞實に永續するは、即はち、孤女學院の眞實に永續する所以のもの也。

○女子請願者

東京府内の一夫一婦論率先者の女子三百餘名、先に刑法に於ける姦淫罪を、男女同等にすべき事を、衆議院に請願せり。請願委員之を審査して、議場に提出すべきものにあらずと判定したりと云へと、論理の明徹せる、情義の正大なる、よく人を動かすものあり。たとひ請願の効未だ俄かに達せずとするも、之が爲に天下の人心を攪醒したる者多し。

近日、前橋の工女三千人、輸出稅全廢の事に付きて請願せんとす。

史傳

フランセス、ウイラード　(其二)

一市を起す

米國の兒童が英國の兒童と異る處は彼れに政治的思想のあるなり、英國の子女能く學び能く遊ぶ、左れども未だ市府の何たる憲法の何たるやに至りては少しも知る處あらず、若し女史が矯風會の依頼に依りて書せる「五十年の一瞥」と題する書を開かば、如何に米國の家庭が共和主義の精神を以て充さるゝやを知るべし、嘗て市府の人ウ井ラード家を訪ひ其の寂寥を慰めし小家の小兒等は此處に市府を創めんとするなりと答へたりと、此の精神は終に此處にフヲレスト、シラーなるものを成立せしめ、穀物の畠は市場と變じ鷄の小屋は穀物藏となり、此處に商業會議を開き紙幣を發行し新聞を發兌し、終にフヲレスト、ホームの憲法をも定むるに至れり其の第一條に曰く、市役員は毎月一回投票を以て定むる事、役員は市長、書記、會計、收税官、驛逓官と定むと、税を徴集し犯罪は罰を科し、メリーウ井ラード夫人は常に判官の務を爲せり斯くの如く彼等の血脈には政治思想の巡環するあり米國の一家は即ち是れ一小共和國なり。

集會癖

斯くの如くウ井ラード一族には組織的の癖ありき、メリーは好んで胸に標を着け集會の準備員となり奔走する事を好めり女史二十歳にして雜誌を發行し詩を詠じ小説をも作りしが終りに至らずして止めり、又倶樂部二つを立てたり、一つは技藝倶樂部一つは市村倶樂部なり、是れ女史が姉妹と共に快樂を得憲法的の精神を行はんとの爲めに設けたるものにして會長と書記とを置き例會を開きて會の働を爲せり、技藝倶樂部規則最後の一節を擧げん、曰く倶樂部の會員たるものは誠實に前の條々を守るべきものとす――フランク、ウ井ラード、メリー、ウ井ラードと、市村倶樂部も同じ會員を有す其目的は會員をして銃獵漁獵等郊外の高尚なる遊戯を爲さしむるに在り。若し小兒を以て大人の父なりとせば此のウ井スコンシンなる農家の一女子は後來婦人矯風會長たるべき人の母なるべし。

第二學校時代

女史は十九才に至るまでフヲレスト、ホームの快樂なる自然の内なる家庭にありしが以來獨立して行かざるを得ざるに至れり、女史は十二才の時より近隣の學校に通學し、十七才にしてミルウオーキー女子大學に入り、後ちイパンストンなるノルス、ウエストルン女子大學を卒業せり、女史は非常なる讀書家なり、十六歳の時博士チックの基督教哲學者及ひ未來の國家なる書を讀みしか途中にて呼ばるゝ事あれば星界の逍遥より地下に引き下さるゝ如しと云へりし程なりき、十八才の時の記に曰くわれ未た母がわれに希臘語を學ぶを禁じたる時程失望せし事はなかりき」と云へり、此の年ウ井ラード一家遂にシカゴ郊外の市なるイパンストンに轉じて以來今日に至るまで此處に住せり、女史餘りに苦學せるため卒業の時に當りては大ひに身躰を害ひたれど其の制止すべからざる意志は女史を支ふるを得たり、時に朝四時に起き、或はペットラーのアナロザーを顔に押しあて床上に昏睡せる事ありき、二十才の時大學を卒業し終に自ら働き自ら生活し世の爲めに盡力すべきの時に至れり。

空中樓閣

普通の女子が學校に於て空想を逞しくするが如く、女史も亦樣々に心を迷はせたり、時にはヴヰクトリア女王の名譽待女たらんと欲し、又キユヘに移住せんと欲し、次で技術家たらんとし、又平原の獵師たらんとせしが、終に單に學校教師たらんと心を定めたり、然れども女史は心に猶一片の信仰を保ちたり、信仰とは何ぞや、即ち女史曰ふ「われ心にわれを待ちつゝあるものを感じたり「われ其の運命の爲めに生れたるを師に告げんとせし事あり、當時婦人の事業多からざりしかば、われも亦何をなすへきやを語り能はざりしが此の一事は確かに信ぜり、われは公開に演説し又筆を執る事をなさんと左れとも此は母にも告げざりし處なり」と。女史かイパンストにて讀みたるマーガレット、フルラーの傳は女史を奬勵する事少々ならざりき、女史讀み終り記して曰く「われ近來マーガレットイフルラー傳の如く益ある書を讀みし事なし、此の書實に婦人の達すべき處を敎へぬ、彼の女之れを得たり、彼も人なり、われいかで得可からざるの利あらんや」と。女史は大望を有せり、始めは人より愛せられ依頼さるゝ人た

らんと望みたり、而して此の一事は眞實なりき、即ち女史は家に止るべき人にはあらざりき、父は女史をして家庭に居らしめんとせしが家庭には少しの種播き菓子の製造の外女史の務あらざりき、而して女史は憐むべきもの丶世より退けられたるを見たり、女史は之れを見て叫べり、コわれは一層好き目的を有するドンキホテたらん事をサンチヨ、ハンザたらん事を望む、今日を救はんが爲め其の人の出すべきを信ず。と。

敎塲に於てエピクテタス

斯くて女史は二十一歳にして學校敎師となれり、千八百五十八年より同七十四年に至るまで十三種の課程を六處の市府に於ける十一處の學校に敎ゆる事となれり、其の敎ゆる生徒の數殆んど二千人に達す、其の學校の内二ヶ處の外は求めずして依賴を受け、一ヶ處に於て主義の衝突ありし外悉く歡待されぬ、然れども女子は決して適當なる敎師にはあらざりき、女史は規律を好まず、敎場に於てプレトー、エピクテタスの著書を讀み無味なる敎授の慰めとなせり、母と聖書とに次でエピクテタスの書は思想を定むる者也きと、女史の敎ゆる生徒を打に鞭を以てせし事ありしが却て父兄の望む處となれり

雜錄

全世界家政會議

本年シカゴの大博覽會の節に開く、世界總會議の婦人部に於ける家政學部の委員は特に下に述ぶる問題に附て世人の注意を促し、且つ明年の同會議に考案を提出するの計畫なり、同會の婦人部とは哲學、科學、音樂、敎育、社交道德の改革、農業等の諸委員より成立し、男子部と同じく會員及び役員を有せり、只此の家政部は婦人部の特有たるなり、同會は明年五月より十月に至るまでの間開かる丶ものなるが、此の家政學は必ず其の緊要たるものなるべし同委員は既に農業部衞生部等に照會して社會家政の爲に充分の討議あらん事を乞り。

本問題に於ては婦人の權力が室家の內に限らるべきや否やを論ずるの必要なし、只如何にせば婦人の室家に於ける事業を改良し得べきやに在り、其の目的は科學と經濟とを究めて家族の進歩を計り、之を以て有力なるものとなすに在り、而して委員の期する處は總會議に於て各國の婦人が互に其の考ふ

る處を相ひ通じ、又五十年以來如何に婦人の万般に於ける事業が進歩せしやを考ふるに在り、殊に注意すべきは本會議を開くの必要を婦人に知らしむるに在り、夫は本會に於て討議する處は家政に向て一大變化を與ふるものなればなり。

委員の預め注意して望む處は第一々家に於て其の收入に比し費す處の食料、家賃、衣類、炭薪、雇人料、其他の雜費幾何なるや其の統計を得ん事なり。第二は既に消費せる全費を明瞭ならしむるに簿記法を用ゆるの利害に關して諸氏の意見を聞かん事なり、委員は此の方法を用ゆれば費用の用途を明ならしめ、收入に對して如何程にて使用し得るやとの問題をして甚だ解し易からしむるものと信ず。

猶委員は右等の問題を互に研究せん爲に通信局を置くの必要を感じ、コロンビアン家政研究幷に通信局なるものを組織せり、以て家政に於ける食物、炭薪、飲水、水道等に付き適當なる科學的智識を増進せんと欲す、殊に委員は食物の種類、其の人身に於ける結果、滋養品の必要及び人力を省くの器械を研究し、外部の職業を家内に於て爲すの方法等より婦人職業の道を擴張するの法を明かにするを望む、次に研究せん事を望むは農家の女子をして男子と同じく農學校に入學せしめ諸般の學術を學ぶと共に家政學の一科を研究せしむるに在り猶婦人に注意すべきは婦人諸氏がシヨートクワ學術研究會の科目及び大學擴張會の講義を讀まん事なり、一國の强固は農業家の智識と繁盛とに在るは事實なれば農家の女子が此等世界會議の題目に注意あらん事を望む。

次に委員は耕作に從事する婦人の數、蜜蜂飼養、養蠶、養禽等に從事する婦人の數の統計を求む、以て婦人をして此れ等各種の事業に注意を惹かしめん爲めなり、但だ是れ等農業に關する事業は氣候境遇等に從ひて大ひに變化するものなれば通信せんと欲する者は姓名と倶に其の地方の有樣等を明記されん事を要すと、通信其他の事は、シカゴ四百八十二番ラ、サンレ町なる家政部委員ウ井ルキンソン夫人に宛て送くるべしと。

今昔ものがたり

○浦上玉堂の識見

秋玉庵　輯

浦上玉堂は天明寛政の頃京師にありて書名を以て聞へたる人

なり、岡山藩の支封池田信濃守の家臣にして、文武に通じ音律を好み、殊に書法の如きは氣韻超凡本邦文人書中には多く得難き處なり。初め岡山に在りしや、其女家僕と密通し遂に相携へて逃亡せり。當時の士風家族に斯の如き醜行あれば速に捕へて手刄せざれば、世祿を褫はるゝの習慣なるに玉堂之れを爲さず、自から解釋を下して謂らく。女の醜行は深く耻づるに耐へたり、然れ共親として自から其子を斬殺するは、人情甚だ忍びざる處なり。熟ら思ふに家祿は祖先よりの賜にして、女も亦祖先の血統なり。均しく祖先の遺物ならば寧ろ祿を棄て倫を重んぜん、恩に報じ君に報ゆるは、祿なくとも他に爲すべき無きに非ずと。遂に家宅を灑掃し什器を整頓して一物も之れを携帶するとなく、夜に乘じて妻子と共に岡山を去る。適々月明かなりしかば路傍の山に上り、笙を吹き飄然として京師に去る優遊以て生を終へたりといふ。其子春琴亦畫を善くし其名世に聞ゆ。池田侯又其家を復し、子孫岡山に現存す。玉堂の行爲藩閥時代に在りて、世の風習に倣はず。食祿に戀々せざるの狀、一見識ありといふべきなり。

○細川忠興の慈仁

細川忠興豐前小倉の城主なりし頃、領分大に旱して百姓等が當分の食物にさへ事を欠くに至りしかば、況して來年の貯穀などはなく何れも殊更難澁せるよし役人共申出ければ、越中守之れを聞きて大に心を痛めけれ共、領內殘らずの事なれば、些細の金穀にては事足り難く如何はせむと當惑せしが、軈てキッと心付て父幽齋より傳はりたる名品の茶入をば近習に齎らせて京都へ遣はし、質物にては多分の金融覺束なし直段よく賣拂ひて云々すべしと命じければ、近習の士兩人承りて京都へ持參せしが、天下に名ある名品なりしかば私の賣買如何あらむとて所司代へ屆の上直段能く賣拂ひ、其金子を以て大坂へ出、大坂にて米、大豆、麥、稗など農民に必要なる食物を悉く買調へ舟にて本國へ廻せしかば、飢に垂んとせし領內の民蘇生の思をなし、安んじて作業なすを得しといふ。

○幸田ひも

眞田昌幸未だ浪人なりし頃、いと麁末なる木綿の打糸を以て大小の柄を卷きたり、或人之れを見て笑ひしに、昌幸曰く譬へ上に錦を卷きたりとて、中身銳利ならざれは何の詮なし。我此魂を見よやとて、スラリト拔て見せければ、兩刀共に正

宗にて有けるにぞ、夫より人敢て之れを笑はず。其紐を名けて眞田打といへりしとぞ。

○氏郷の濟儒

蒲生氏郷諸士を饗する時には、自ら頭を包みて風呂の火を焚きしといへり。時代柄とはいひながら、手輕く無造作なるよにて、諸士に厚くする君臣の情は斯くあり度ものと古き物の本に見へたり。

○侍女筆野の機轉

筆野といへるは、備前侯池田治政の側室にして、其寵に誇り君家の内亂をも惹起したるほどの奸婦なりしは、世に岡山騒動とて世の人知る處なれば、其顛末は茲に之れを贅説せず。唯其奇慧人を籠絡するに堪たる一斑を擧むに。備前侯治政といへるは、意氣活達にして、人に下らざる性質なりしかば、當時の閣老松平越中守、(樂翁公)の制度にも服せず。其頃世人の口ずさみに「越中に立つく山が二ッある。京で中山、備前岡山。(京で中山とは大納言愛親卿の大上天皇尊號云々を殿中にて抗議せしをいふ)といはれし程の人にてありしなり。或時雲州松江侯と(不昧齋と號す是亦不屈の英才なりしなり)互に相降らず。松江侯坐を立ちて歸らむとするに、主人之れを送らむともせず、席に在りて自若たり。其頃の習ひとて、格式悉く定めありて、一旦之れを屈する時は、例を後に殘し一家の耻辱とも爲る事なるが故に、主人の送らざるを見て松江侯も亦坐を動かず。供頭を召て乘物を此處まで持來れと命ず、備前邸乘物を坐敷に揚るを拒み双方の爭ひ何日果つべしとも見へず。主客の臣下殆んど困却を窮めたる時なりしに、筆野は之れを聽きて徐かに其席に出て、曾て不昧公の茶事を好み其道の數奇者たるを知るが故に專ら其話を始めたるに。公も已れが好める事なる上、筆野が才辨と美容に其怒りを忘れ、談稍や佳境に入りしを見て。當家の茶席石の据へやう、燈籠の置き所など一應御覽を願ひたしと請ひければ、公之れを諾し庭に下りて彼是見繕ひ居らるゝ中、路次に乘物を廻し置き、最早坐敷に御歸りなく、此處より召させ玉へと勸めしかば、公も笑ひて夫れに從ひ、事なく相濟み、主客舊交故の如くなりしとぞ。若し此時筆野の機轉なかりせば、僅の事より兩家の葛藤とも成るべかりしを、彼が才器に依りて事故なく、却て客を重んじ交際を温めたるの思ひありしと、其時坐に在り

し人の語り傳へたる話しを聞しまゝに。

○望月玉蟾の洒落

望月玉蟾は京都の畵工にして、有名の人なり。今の玉泉氏の先代にして、世々の名家たり。維新の前には畵師多く法眼とか法橋とか、或は何の守、何の介など授領官名を記し世人の之れを需るものも亦之れを喜ぶの風習ありしなり。玉蟾は此の如き虚名を好まぬ人なれば、或人畵を請ふの序で、先生の畵は申分なき名筆なれ共、惜むらくは官名なきが故に、曠れ立ち難き憾あり。願はくは唯玉蟾とのみならず、落款を立派に記し玉はれといふ。委細畏れりと領承し、其望む處の畵を認め畢り、落款して曰く、因幡守藤原朝臣三軒目隣望月玉蟾と。此因幡守何某とは、隣家に住する、錺師の名なりしとぞ。洒落にして虚名を屑とせざるの氣象見るべしなり。

○緒方某の果斷

嘉永安政の頃、大阪に於て蘭學及び醫術を以て聞へたる緒方洪庵の父某は、元と備中足守藩の勘定方を勤めたる人なり文政中足守侯故ありて其封を削られ、從て家臣の祿を減ずるか或は人員を少くさゞれば、藩の用度支へ難し。去りとて誰彼と名指して退去せしむべき事も爲し能はず、素より小封なれば、家中一般の減俸をなさむには、當日の糊口にも苦しむべしと進退處置に窮し居られしに、其勘定方として一藩の出納會計を主宰せし人なりしが、果斷卒先して仕を致し、浪人となり自ら生活の路を圖らむと獻言す。衆之れに激せられて、自ら請ふて去るものあり、藩政爲に整頓することを得たり、某國を去りて大坂に至り笠を編みて生活す。洪庵時に年少し、師に就て醫を學ばしむ、由て初めて蘭學に志し、嶄然頭角を露はす。後東京に來り益々學業を修む。當時の書生算數を解するものあし。獨り洪庵父の會計吏たるを以て、曾て學んで得る處あり。故に洋書を讀むに當り、理會する處太だ速なりしといふ。浩庵天資の材器を以て、大名を一時に轟すに至りしと雖も亦其父が小祿に戀々せず。果斷勇往の畧有りしあらずむば、少年才子をして一小藩の俗吏と爲し了らしめしやも亦知るべからず。有爲の士は往昔家祿世襲の時に於ても尚且此の如し。況んや今の世自立の志なく、僅々の俸給に安んじ、人に依て事を爲さむとするものは、反省する處あるべきなり。

孤女學院献堂式の歌

（新撰讃美歌第二十一番の譜）　紫苑山人作

一　いりあいのかねは　かすかにきこへぬ
みそらはくもりて　あめつちはくらし。

二　のわけのあらしは　このはをまきて
かれたるおばなを　うちておとさむし。

三　とりははやしにと　つばさをはやめぬ
ひとはいへぢにと　いそぎてゆくめり。

四　われのかへるべき　いへやいづこなる
われのちゝはゝは　いまいかにせしや。

五　とりにもすはあり　きつねもあなあり
されどもこのみは　みちにさまよひぬ。

六　そらのとりをかひ　のゝゆりをそだつ
あまつおほかみは　われにおやをたまふ。

七　われらはいまより　ちゝのふところに
よりつゝすゝみて　まさみちやあゆまん。

八　みそらはれわたり　ふじのたかねには
あさひのにほひて　あめつちひかりぬ。

兒籃

吾が宿の花

第八回（上）　若松しづ子

結局ルーセが叔父と歸るに决り升た。ルーセ自身は種々雜多の不都合を申立てるにも係はらず、叔父は心をきめて中々動く樣子が見えませんでした。ルーセの行き度ないと思ふ第一の理由といふは見ず知らずの叔母に悅んで迎へられまいといふ氣遣ひでしたが、是れは流石に叔父へ打明かしませんでした。先づ家内中がいはば他人同樣親みのない中へ突然行つて厄介になるといふとは思つた丈りでも身が縮まる樣でした。亦一方には自分の身躰を氣遣て、他とは一向顧る暇のない兩親の勸が有つて見れば、是には從はねばならぬ樣になり升た。叔父が云ひ升た、

着物のとなどは御心配は入ません、入用のものは萬事ニユーヨークで整へられ升から。

併し一週間猶豫の有る間には不足勝な衣類へ幾分か必要品を

補ふとが出來ずて、暫時は家中のものが一心不亂にルーセの旅よそほひを致し升た。此混雜の忙敷中に打雜つて居るルーセは近々に愛し親しむ家族を離れるといふ樣な大事が眼の前に有らうとは思へませんでしたが、其中叔父が立歸へり升て、直樣出立といふとになり升と、俄かに氣後れがして來升た。それで、母を影へ呼んで、

かあさま、どふぞ遣らないで、お家に居る樣にして頂戴。

と申し升した母は氣強しようと心に決したとも此時忘れて、

ほんにうちにこのまゝおいでゝ差支へないのだと好がネ、推切つてうちに置れる樣なら仕合なのだけれど。

ルーセは悲しげに哀願して、

併しかあさまのお側でなければ、一寸の間でも嬉敷とは有ませんよ。

ダガネ、ルーセさんや、こゝも、そこも神樣の在らつしやるに違つたとはないからネ、母などが幾人居たとても神樣の保護して下さるに越したとはないからネ。

ルーセは涙ながらにホヽ笑み升た、それから母上がこれまで長い年月自分を愛し萬づを忍んで養育して下すつたことをよくお禮いつて、それから別離の間は始終絶間なく、母上を思ふといひ度と思ひながら一言も口へは出ず、叔父に急ぎ立られ、外方へ走り出で、一人〱と名殘惜しさうにキスしてそれでとう〱行つて仕舞ひ升た。一同は涙ながらに見送つて居り升たといふ譯は家族の團欒を破つて、一人他鄕へ行つたのはこれが始めてゞ、離別と面會の間に何が有らうといふことは誰も分らなかつたからでした。みんな泣いた中にたゞアーサ丈は戸に寄りかゝつて、顔は靑み切つて居ても、取亂しては居きませんかつた。自分はモウ殆んど成人になつて泣いては濟まぬといふ心持て、ヂット立つて見送つて居升たが、其中一人になつたのに氣付いて、靜かに寢間へ行き、戸を閉ちて、ルーセの居る處までとゞいて呼び戻せるかの樣に兩手を擴げて、ルーセさん、ルーセ姉さんと叫び升た。第一番に淋しく、獨り殘された感じのしたアーサは殊勝にも萬事を心ひとつに秘めて、間もなく、朝〱の役目を務めに下へ下り升た。ハラが其後ルーセに手紙を遣る時「一同大泣に泣候ひしがアヽサ樣已は然らず」と認め、さて何故さうあつたかと訝かり、其中何のとも一切忘れて仕まひ升た。然るに母はいと

と優敷アーサが此日から倚一層物柔らかに、成人らしく、母の爲に氣遣ふ注意は寸時もたゆむとのなとに氣が附升た。男兒ながらも柔和なる心を以て孝を盡しませば、母の勞苦を慰める法方はいくらも有るものです。

出立して三日目にルーセは目的の據處に着し升て、叔母と從妹に迎へ入れられ升たが、其待遇は温いまでゝなくとも先づ深切で御座ひ升た到着の後間もなく寢處に入る樣に勸められて心中大に悦び升た、これは旅疲れ已でなく何となくきまりわるく、心苦敷思ふたからでした。出立前に兩親はルーセの爲に心を盡して衣類の準備をして與れた事故、却つて不相應に華美で眼立はせぬかと案じる位で有つたのが、從妹ヘレンを一眼見ると共に自分のみなりの田舍びて粗野なのに氣が付き、心の中に、こゝの方〳〵はきつと世間へ對して私が耻敷に違ない、かふいふ風で來たのが殘念で有つたと思ひ升た。兼て書物などに田舍の從妹たちが都へ出てのなり振、言葉遣ひなどが親類どもの大耻かきになるといふとを讀み升たが、現在自分が其境遇で人の迷惑になるとかと思ひ椅子に、寄つたまゝ茫然と考へて居升た。併し暫らく心中に煩悶する中心を平和にする決心も稍々出て來升た。自分は父の身分に應じて拵らへて與れた着物を着て居るに何の耻らうとがあらうそれを兎やかう氣を揉むのは、途法もない過りで極めてはしたないとである、叔母さまの迷惑になるとは甚だ氣の毒ではあるが、併しそれはなる可辛棒せねばならぬ、と考へ、さて兼て身も離さぬ小形の聖經を繙いて彼の「野の百合花をおもへ云々の一節に目を止め、それより續いた一章を讀み終り升た○聖經はルーセにルーセが着物を要するとは野の百合の必要に異なるとのないとを神のよく御承知であるとを敎へ、且つルーセはたゞ野の花の如く神の賜ふ處のものを滿足して着よと諭し升た○かく有難き訓戒に窘められて、ルーセは柔和に精肅なる精神に立ち反り升たが、此精神が此小娘の容貌と風采に輝り渡つて華美に着かざつた婦人の持たない特有の愛嬌になり升た。

或人の情けの言葉は、
兵卒が休み日に銃口に挿す花に似たり。

ロングフエロー

摘要

○棄兒の多少（統計雜誌）

年齡	一年未滿 男	女	二年未滿 男	女	三年未滿 男	女	四年未滿 男	女	五年未滿 男	女	六年未滿 男	女	七年未滿 男	女	八年未滿 男	女	九年未滿 男	女	十年未滿 男	女	十一年未滿 男	女	十二年未滿 男	女	十二年以上 男	女	合計 男	女	計
明治十年	一	一三	四	四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	五	一七	二二
同十一年	九	一〇	五	一	二	一	—	—	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一七	一三	三〇
同十二年	二七	一五	二	二	一	三	三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三三	二〇	五三
同十三年	二二	二四	三	三	六	一	二	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三三	三〇	六三
同十四年	二五	一三	一七	六	七	三	一	二	—	一	一	一	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	五二	二六	七八
同十五年	一二	一五	八	四	五	—	二	一	一	—	二	—	—	—	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三〇	二三	五三
同十六年	一五	一三	一二	六	七	—	三	—	一	一	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一	四	—	一	—	—	—	四一	二〇	六一
同十七年	一四	一三	五	五	三	一	二	—	一	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二六	一九	四五
同十八年	一六	一三	一二	一一	三	一	一	一	二	—	一	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	三六	二六	六二
同十九年	九	一〇	一〇	一〇	三	四	二	一	一	—	一	—	一	一	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—		三〇	二六	五六
十ヶ年合計	一五〇	一三九	七八	五二	三七	一四	一六	七	六	三	六	一	四	一	—	一	—	一	—	一	二	一	二	一	—	—	三〇三	二二〇	五二三
（男女計）	二八九		一三〇		五一		二三		九		七		五		一		一		一		三		三		—		五二三		

本表の示す所を要言すれば第一、棄兒は年々男に多きこと其割合は男百人に對し女七十二人なり第二年齡の長ずるに從て男の方多し即ち二年以上に於ては男百人に對し女三十九人の割合なり第三、棄てらるゝ年齡は男女共初年に最多を現はし次年より漸々減ず聞く下等社會に於て女兒の方を喜ぶ所以のものも長じて後奉公に出すに都合よきことと或は娼妓に賣ることとも得べしとか、

批評

(119)。女子教育論

博文館にて發兌せる、普通教育全書の第七篇に、永江正直氏著はす所ろの、女子教育論あり。

中本一百七十二頁にて、章を六に分かち、第一章總論。第二章、女子の體育。第三章、女子の智育。第四章、女子の德育。第五章、女子の美育。第六章、結論。

斯氏教育論、如氏教育論、女鑑、其他古めきたる書二三種を、種として、匆卒の間に書流したるものか、所論何如にも淺々しく、實際、女子教育に從事せりと言はるゝ人の熱心なる著作にして、見るべきものにはあらず。

但し、女子を優遇し、之を重んずるの精神は確かに見はれたり。之れ、門外漢が濫りに、女子教育の事を談ずると異なる所以か。

左れど、高等女學校には、今日の英語を全廢し、算術の程度を低くゝす可きとを所望せり。其教育上の意見の大略、之によりて推知す可し。

○婦人の權利問題に關する好著述

其書は即ち、政治上に於ける婦人の地位を論ず、と題し、巴里大學法學部の募りし懸賞問題に應じて出したる論文なり、著者は博士ルイ、ミランクと云ひ、白耳義の法律家にして婦人問題に關しては歐州中隨一の勇將たり。此の著述たるや實に婦人の政事上に於ける權利を尤も明晰に論ぜし書にして且つ尤も精細なる調査に基くものなり、其の第一章は男女の同權を論じ、始めに、婦人も男子と同等の權利あるを主張せし論者、プレトー、コンドルセット、ヒフペル、ジヨン、スチユワルト、ミル等の説を評論し、次で男女權利の不同を說く反對論者の説を評論し、其の論據の薄弱にして取るに足らざる事を論ぜり。氏は婦人の身躰搆造の政治上に運動するに適せずとの論を駁して曰く

素より婦人は子を擧け之を養育するの責を有す、然れども是の勢あるが爲に常に室家に在りて決して社會に出づべからずと言ふは、男子は婦人に勝りて筋力ありて勞働に適するものなれば終日外に在りて勞働すべしと云ふも一斑なり、之れ理なきの論ならずや、抑々智力なるものは男女共に同等に天より賦與せられたるものなれば、兩者同等に之を用ゆるを得べし、解剖學の示す處に依れば、男子も單に勞働のみを事となし得べきものにも非ず、女子も常に童兒の養育にのみ從事し得べきものにも非すと、而して進んで過去の經驗に依り婦人の政治に關與するの利を說き、猶佛國革命の時に於て婦人の干涉が害を及ぼしたるを論じて曰く

當時若し婦人の權利が承認され、直接に政治に關與し、正當なる責任を有せしならば彼れの如き慘狀を佛國に殘さゞりしならんと、而して婦人の犯罪の少きを以て、若し政治界に入らば必ずや其の道德を高からしむるを得べしと論じ、漸を追ふて婦人に對するあらゆる反對論を說破し、終に若し婦人をして政治上に關與せしむるとせば凡ての婦人を許すべきや、或は單に未婚の者のみを許すべきやとの問題を提出せり、氏は決して凡ての婦人に其の權利を與ふべしとの論に不同意なるには非るも、現今の有樣にては先づ未婚の者のみに許すべし、之れ或は婦人の權利問題の試驗ともなるべきものなりと斯くて歐洲に於ける結婚離婚及び婦人の敎育被雇等に關する法律の改革すべきを述べたり。

氏の結論に曰く、婦人が男子に服從せるの時期は既に過ぎたり、男子の獨主權は將に滅し去らんとす、是に於てか吾人の室家は安全となり、壯健となり、其の快樂を破るの恐れあらず、婦人は己の權利を喜び得るのみに非ず、是より男子の器械たるを免れ、男子の大膽なる友となり、男子に同情を表して慰むる者となるなりと。

本論猶ほ附して現今文明國に於ける婦人の權利を示せり、其の言ふ處に依ればワイオミング、ノバ、スコチア、アイルスオブ、マン、智利、イクエートル及び墺國の五縣に於ては婦人が全き權利を有し、澳太利の匈牙利、クローチア普魯亞、撒遜、ブランスウ井ク、瑞典、フ井ンランド、アイスランド魯西亞、英吉利、蘇格蘭及び英國殖民地加奈太、濠州ニュジーランド等に於ては市廳役員の撰擧權を有し、合衆國の二十一州に於ては學校役員撰擧の權を有すと。

而して同懸賞は終に本著者の手に落つるに至りしを見れば、如何に婦人權利問題の歐洲に於て待遇せらるゝかを知るに足らん。

家政

家内重寶錄

ふみ子

雉子、鴨、鳩等の罐詰法

雉子、鴨、鳩は鳥類中最も多く脂肪に富むものなり。冬日之れを捕へて羽毛を剝ぎ去り、適宜に調理して之れを罐に裝ひ、少量の胡椒、食鹽及び淸水を注加し。尙ほ各自の嗜好に從ひて適宜の野菜數片を加へて臘にて其蓋を密封し蒸汽に煮ると一時十五分間にて取揚、又た密封して更に煮ると二時間位にて取出し放冷すべし。蓋し鳥類の罐詰に野菜を加へ置時は、後日に至りて取出し調理する時に甚簡便なるのみならず、又大に香氣を添へて嗜好に適するものなれば此二三鳥類に限らず、他の鳥類を罐詰となす時にも、能く其原品に就て考へ適宜の野菜類を加へ置くべきなり。又肉に味を付するとあり、是は醬油、味淋、砂糖等にて鹽梅したる汁にて煮て、之れを罐に詰め、其煮たる汁をば八分目ほど罐の中へ注ぎ入べし、而して其汁に香氣を帶ばしめんとならば、胡椒の外に丁子或

は蕃椒を加へ置くも宜し。

○牡蠣の酢漬法

凡そ牡蠣は如何なる種類にても、夏日炎暑の候は子産の時節なれば、肉瘦せ味も少しく辛くして、食用に適せざるものなれば、之れを捕獲するには、秋晩より翌年の初夏の間を最上の時期とす。時としては奸商輩其容積を增大膨脹ならしめんが爲め久しく眞水に浸して販賣することあり、此の如き品は其眞正なる美味を失するものなれば、剝身の牡蠣を購求せむとする時は、能く〳〵注意すべし。

之れを酢漬となさむには、先づ肉を抱和鹽水に浸漬すると少時にして、肉の部分の損せざるやうに勉めて外緣の黑色なる部分を除き、且つ貝殼の細片をも混合することなきやうにし。籠又は笊の如き器物に揚げて水分を滴らせ、磁製鍋に入れて上等の酢に適宜の淸水を和し、此中にて煮ること凡そ十分時間ばかり、此間時々杓子等にて攪拌し底に付かぬやうにすべし。而して其上面に浮ぶ處の汚色の泡沫は隨つて生ずれば隨ふて抄ひ去り、其後牡蠣を抄ひ取りて罐又は瓶に詰むるなり。而して別に上等酢に適宜の淸水と、少許の白糖及び、胡椒、丁子を各適宜に加へて沸騰せしめたる後放冷したる汁を充分に注加して罐ならば一旦封蠟し瓶ならば密栓して之れを貯ふれば、庖厨の一好料となるべきなり。

○密柑ジヤム製法

先づ密柑の表皮を剝ぎ去り、菓肉を淸潔なる桶又は擂鉢の如き器物に入れて、棍棒にて壓し潰し。次に白布の袋に入れて壓搾し、其液汁四合五勺に付白砂糖百八十匁の割合にて混合し、煎じ詰むる時は、其色稍混濁にして、半透明の液となる。之れを罐に注ぐこと大約八分目に至り蠟封して鹽湯に煮ること二三十分にして取り揚げ、空氣を排除し密封して直に放冷するときは、永く腐敗變味の虞なく貯藏し得らるゝなり。

○蒸筍の法

またけにても、はちくにても好し。新らしき筍を皮ながら大釜に立置き、すり糠を釜の中へ入れて筍をこげぬやうに詰め、水を釜八分目程に入れて、釜の上に桶を蓋にし、息の出ぬやうにして三時乃至四時も火をそろ〳〵と燒きて蒸し煮にするなり。釜の口一ぱいに筍立つれば猶更宜し。能く蒸したる時取出し板の上にて押しひしぎ、其後立かけて雫を能く滴らし

置くなり。二十日程も保ち味變るとなし。料理の時は其儘あへものにしても、又はさしみにも煮物にも汁にも用ひて宜し。

○鷄飯

鷄の毛を能く抜き、羽を打ち毛燒きして、夫れを丸ながら鍋に入れて湯煮し、鷄の脂肪水に浮きし時取出して其ゆで湯にて飯を仕かけ煮るべし。而して。湯煮したる鷄は皮をむきて其肉を十分細かく引裂き、飯の煮立たる時に飯の眞中を掘りて其處へ入れ飯にて又其上を押付置堅く釜の蓋を爲して能く〱蒸し置くなり。而して飯黄色になりたる時器に盛り肉は上置にすべし、

雉子飯も同法を用ひて可なり、味を付くるには食鹽にても醤油にても適宜に用ゆべし、

○頭髪洗滌水の製法二三

左に記する洗滌水は、毛髪を清潔ならしめ、其脱落を防ぐのみならず、頭の皮膚を強健ならしむる効あるものなれば、泰西諸國にて賞用せられ居るなり。

迷失香水と稱する洗髪水は、迷失香を蒸餾したる水二升五合程に、酒精二合と精製炭酸加里二匁を混合したるものなり。

倶利斯林水又は芫菁水と號する洗髪劑は、迷失香を蒸餾したる水二升五合程に、芳香安母尼亞二匁、芫菁丁幾四匁、倶利斯林八匁を混合したるものなり。

博士「ロック」氏が女王「ヴヰクトリア」の御用品として調製したる洗滌水は、安母尼亞水二匁、扁桃油二匁、迷失香越幾斯二匁、肉豆蔻花油五分と、薔薇水五匁の五種を混合す。其法は先づ安母尼亞水と、扁桃油を能く混和し、次に肉豆蔻花油と迷失香越幾斯を添加し、強く振盪して充分に混淆せしめ、後薔薇水を和するなり。

○精良齒磨粉調製法

普通市中に販賣する品は、其容器と張札等にのみ注意して、其原品は珪石末澱粉等の齒牙に對しては、有害又は、無効なる材料を用ひ、只薄荷龍腦等の芳香料を加味し瞞着するものなり、眞正に齒牙口中に有効なる原料を用ふるものは實に万中の一二ある位ならむ。今左に精良なる齒磨粉調合法の二三を掲げむとす

樟腦三十匁に少量の酒精を注ぎ乳鉢にて搗碎き、次に泥菖根末六十匁と精製白亞百二十匁を混合す。

精製白亞三十匁、炭酸安母尼亞六十匁泥菖根末六十匁、桂皮三十匁、沒藥三十匁、精製白亞三十匁、丁子油二分の諸品を混合す、

木炭細末百匁、機那皮末四匁、拘櫞油五匁の三品を混合す、

黃金の砂二ッ三ッ

女護嶋見集

(廿三)生栗を貯ふる法

生栗を貯ふるには、能く熟したる物を、乾たる砂の中に埋め置べし、然る時は翌年の秋頃までは生にて貯ふるとを得べし、但し鼠の付かざる樣に注意すべし。

(廿四)庭内に小鳥を集むる法

庭に種々の小鳥を集めんには、小鳥の好む果實の樹木を植ゆるに若ず、其種類は、せんだん、しぐれ、むめもどき、なつめ、なんてん、ぴしやご、などの樹木を植ゆれば、初秋より冬期迄種々の小鳥絶ず庭に音づれ來るべし。

(廿五)甘薯にて餡を製する法

甘薯にて餡を製するには、甘薯を蒸して外皮を取り去りて、應分の砂糖を加へて、臼にてよく搗き拌ぜ通常の餡の如く、團子に入れ、餅に附着して食すれば、小豆の餡より淡白にして其味ひよし。

田家のこよみ

畜耕子編

○小寒一月五日　○冬の土用、一月十七日　○芹乃榮○水泉動○雉始鳴、

○一月一日より二十日まで、農事園藝

○棱木　梅は一月十日より二月下旬迄に棱て可なり、又將に芽の出むさするに方りつぐもよし。

○施肥　大小麥、蕓薹、桑、茶、楮、桐、江南竹、等は肥すべし。

○一月一日より二十日まで農事の手當

○家禽、の食物は氷たる飯の洗流したごを與ふれば鼻呼カタルを引起すべし、なるべく暖かき食物を供し、午後は成べく早く食を與へて塒に就かしむべし。

○堆肥、及び土肥は此節より製したるものは、蟲の發生するとなし、但し雨風に曝されざる樣注意すべし。

○稻種、の水撰は此節より二月上旬迄に行ふべし、其法は稻種を三日間程水に浸し浮びたるものは取除くべし、其他の種物もかくすべし。

此月は手始の時季殊に農家の閑暇なる節なれば、器具の惡きものは修繕し、不足の物は之を調へ、薪材は此季に伐り家屋の修覆など万事心を用ゆべし。

○園藝法　小言

本邦人は槪して、園藝の有益にして、最も貴重なるを知らず、徒に盆栽、鉢植などを玩弄せらるゝは甚だ歎ずべきなり、それ園藝は獨り農家の業に止まらずして、人類に樹木は甚だ大切なる關係を有す、單に果實燃料の利益を得るにとゞまらず、居住周圍の空氣を淸頁にし宅地に浸潛含有せる、不潔物を吸收し消散せしめ、又水利を整へ、其功能擧るに遑あらず。又果樹を栽培するとは、最も高尙なる快樂の一なり、余が、田家のこよみ、を編するに當り、殊に之を續載なさむと欲す讀者請ふ之を諒せよ。

理學

○淘汰に適する狀態

淘汰を行はんと欲すれば強いて異れる種類のみを集むべからず、只同種類のものを多數に集れば其內より自然に異れる異種のものを出すに至るべし。左れはヨークシアイアに於ける羊には異種のものなし、是れ皆貧民の養ふ處にして隨て多數のものを養ふ能はざるが故なり、之に反して同種類の樹木を多額に培養する園丁は彼の異種のものを集むる好事家よりも却て新奇なるものを得る事多し。又淘汰に尤も必要なるは良く注意して養ふの一事なり、苺の如き始めは左程に好きものには有らざりしが、其果實の內より好きものを採み取り其の種を播き夫より又發生せし實の內より又好きものを取りて播き、暫時斯くの如くして今日見るが如き甘味なる苺を得るに至りしなり。

○鳩と猫と

猥りに雜婚するを妨ぐるは異種の動物を得るに必要なる事なり、雜婚を自由に任ぜば終に特別なる種類を失ふに至る、故に野蠻人種の內に在る動物の或る一種族の內には異りたる種類を見る事稀なり、之れ全く雜婚に依りて特殊の性質を失ひ一種に歸するが故なり。例へば家畜の內にて鳩の如きは一番を一生の間共になし置くを得るなり、故に各々特別なる性質を發達して種々の異きものを得、之に反して猫の如きは常に四方に走り廻り到底一番として養育する能はざるものなれば其の種類は變化せずして終に今の如き一種の猫のみを見る事となれり、其他驢馬駝鳥などに多くの種類を見る能はざるは皆種々の狀態より此の淘汰の行はれざるに依るなり、即ち驢馬の如きは一班に需用なく多數を養ふの必要なければ少數にては淘汰の行はれ難きを以てなり。

○天然と動植物と

アルプス山の頂きにある植物の丈け低き、バルチック海の薄暗き水中に生ずる、貝類の小なる、北極地方に住する動物の毛の厚き事等は皆能く天然の然らしむる處にして、且つ遺傳の法に依り益々其の性質を發達せしめしに依るなり。

○生存の競爭

凡そ生物は皆此の生存競爭の支配を受けざるものなし、此の

理を解せば動植物界の理論を解するに甚だ容易なるへし、例を擧げて言へば森林の中に棲へづる鳥は樹木の間に生存する蟲類を食して生活し、又此れ等の鳥類は鷹鷲の如き強大なる鳥類の食となる、斯くの如く弱きものゝ肉は強きものゝ食となりて一切の生物は生存するなり、又獸類が飢饉にて食の乏しき節には互に相食む是れ又生存競爭にして此の種の事頗る多し。

生物の繁殖

マルサス氏の説に依りて生物は幾何級數の比即ち二より四、四より八との如き陪數を以て繁殖するとは一定の説なるが如し。左らば終に生物は全世界に蔓延して寸地も餘さゞるに至るべし、今尤も生殖する事の少き人を以て廿五年にして始めの人數の陪を得る者とせば千年を出でずして全世界は人を以て蔽はるゝに至らん。又植物が毎年二個の種子を出すと假定し此の種子が地に落ちて發生し、又其木の種子より次の子を發生するとなし斯くの如くして續かば二十年にして百分本を得るに至るとの計算を爲せし人もありと。象は尤も繁殖の遲きものなるがダーウ井ン氏の調査に依れば三十歳にして始めて子を産み始に一年を隔てゝ六匹を産み九十歳に至りて止むものなり、若斯くの如くして進まば七百四五十年にして一番の象より九千万匹を得べしと、此は只理論の上に於てのみ然るにあらず、實際に於ても其の驚くべき勢を見る事屢なり、ラ、プラタ地方の平原に三マイル四方盡く薊と其の一種とを以て蔽はれたるは實に前に歐洲より輸入されて後斯くの如くに至りしなり。又印度コモリン岬よりヒマラヤに至るの間に連亘して一種の植物あり、之れ亦米國發見後同國より移植されしものなり、之を以て見れば幾何級數の比に依りて繁殖すと云ふ説の妄ならざるを見ん、只時に氣候風土或は他の妨ぐるものありて常に斯くの如く繁殖せさるのみ。

小說

佛人ピコット夫人の著を父の教をうけて斯くは物しぬ

内助（上）

花園

「奥樣〳〵こゝに御客が厶りましたと嬉しげにおはたゝしく

よばゝる侍婢の聲にかけ出し夫人は「マアよかつたネどれお見せと飛立斗に馳よりて手に取上げ見るにつけても夫の歸宅のおそさ、玄關番はさらなり料理人迄も門前にたゝせて夫の姿みえばつげよとじれにじれてまち佗るも若き女の習なり、ジヤンヌ夫人はためつすがめつうれしげにながむる沓の爪先より踵の弧線巴里市中第一とよばれたる某の手ぎはいちじるしきを心の中にほこりぬる小羊皮に縫上げしサボー（木製の田舍婦人沓）まことのものとまがふ斗なるにて今宵某夫人の催しなる假裝踏舞の席上をふみこゝろみ喝采を得んと心こゝにあらぬ樂しさ水車屋の世話女房の作にしなして赤き裾みじかく端折茜黄色の胸掛をかけ、大やかなる麥藁帽子の上には色あたらしき草花をかざしたるが肩の上までかゝりたるなど時にしたがひしもうるはし、數百圓を消費して造りし沓をしまひなくせしに漸々侍婢のさがし得たりしになほ夫の歸まちどほくまつまのすさびに姿見に我姿をうつし、かくて行かんには、なにがしの令孃もかの夫人も色なからんとゆきつもどりつみとるゝもしらぬ未來をうつすべき鏡のなきぞかなしきや、夫人は巴里の婦人の風采を備へ風流社會に稱贊せられしもと一商人の娘にて廿二歳の時十萬フランの持參にてカールジユポイといふ一貧生に嫁せしなり此一貧生も竟にはこの國にて一大家とよばれ今は文學者の中にも時めきて世に用られぬ、させる奇才ありとならねど性質機敏にして時好に投ずる批評、史傳、論說、など筆にまかせて公にするが中にも別きて小說は輕妙にて興趣ありとてもてはやされぬ、シユポイの母はジヤンヌが生立より知て深く愛つるに、又十萬フランといふ持參にも心うごきたれど、聞ぬ氣質とて、我子ジユポイの資格嫁の下にあらんとを嫌て、後々の發達を待、身代相當の嫁を得たしと望みつるまもなく、ジユポイは數度新聞紙にも名をうたはれ所得も少からずなりたれば、もはや婚姻せんもあしからじと、又もや此方よりジヤンヌに其趣申込ぬ、ジヤンヌは幼きよりの學校友達なれば、心をも知合て否といふべきふしもなく、直に咄はまとまりけり、ジユポイはジヤンヌが熱心なる愛を得たしと、少婦の奴隷と身をなして力たれど、眞誠の熱愛は却て渡世の文學の爲に奪て、遂には心を引かへすやうになりしも理なり、カールジユボイの編述せし脚本は、其文句流麗なりとてもてはやされ、各劇場の求めに應じ、筆をやすむる

ひまなければ、所得もいよ〳〵加はりて、ジャンヌと住ふべき家居も出來、中等人家の生計は難からず成にけり、ジャンヌを妻にむかへてよりはいふがまに〳〵浪費して、派手を粧ほはしめぬ、ジャンヌはたゞ〳〵夢心地にてしれる友達に身を比して幸福なる我身をよろこびけり、生來怜悧の性とて、いづれの宴會にも、人の下に立事なければ、われも心傲り、夫も人にほこらん爲、身代の限り派出を盡し、財の乏しくならんはしらず顔にて、たゞ〳〵裝飾の美のみに心を盡しぬ、カールはかほど愛する妻ながら、なにとなく心中おもしろからず、ものたりぬ心地するは、ジャンヌは一商人の娘にて銖兩の利を爭ひ、敎育にはおろそかなりし父におほし立られ、俗間の交際には才智を以てもてはやさるれど、相對して互に思想をかたりあふ樂なく、わがいふ事はあなたに通ぜぬ心地して、もどかしきにつけ、文學者の妻としては欠けたる所なしとにもあらずなど、一人思にしづみけり、この思たゞ夫のみかはジャンヌもものたりぬ心地に、五年の年月をあかしくらし、他人の配偶間のさまをみても、好伴侶てふものはかくあるべきを、わが夫のなど熱心に愛し給はざるやなど、したにうらむ事もありて、愈々他に樂みを求むる心長じ、交際社會に派出を競ひて、室家の樂みは、しらぬ夫婦が、相對しては默々として木偶の如過しぬ、夫はたゞその木偶のうるはしき衣服着飾しを、人にほこらん斗を無上の樂みとなしたりけり。されば今日の假裝踏舞會には物すきしたる姿を、夫にもみせてほこりたく、又夫にもほこらせたく、歸りをまち佗たるをしらず顔にもつれなき夫の振舞なりや、ともだゆる折しも、門に聞ゆるさわがしき人聲、早く夫の歸りませしとかけ出、立むかへば、あやしや、職人らしき一群、人のかたちのごときものをかつぎ來りぬ、死せる如き手は垂れて力なく、頭は綳帶につゝまれて、血さへしみ出たるもおそろしき姿ぞ、これ今迄まちにまちたる夫なりける、カールはこの頃より一の小説をものせんとて、其材料を求めん爲、ある製造場の機械を撿せんとてこの日幸の傳手をもとめ得しかば、直ちにそこに行しも、是までの小説は、人氣をのみはかりて、淺薄なる伎倆もて、聲名を博せし非をやゝ悟り、學理に基きて、眞實を種としてあみなさんの設想なりしなり、命には別條なしといひながら、臥床によこたへて醫師も共に立添介抱するうちもジャンヌは、夢に夢み

しこゝちにて泣んに涙なく、顔を掩ひし半巾に手のふる〳〵とゞまらず茫然と側に佇みしが、漸われにかへりては、氣絶したるにか心臓の鼓動はげしく見えながら、死せしごとき夫の顔を瀧と迸しる涙のひまよりみてはすゝりあぐる眞心の通じてか、ジユポイはかすかに細き目をみ開らき、ジヤンヌ、ともらせし一聲にこらへもあへず、泣倒れぬ、しばしありて熱度甚しく譫語をもいひ出しくるしめバ、ジヤンヌはこの日より夜を晝にして、看護たゆみなく、機械の如運轉し、勞かるゝ色を見せねば、醫師もいつも活潑なるに引かへて沈默の姿をあはれとみ、多くすかたき婦人と人にも語ぬとぞ、ある日醫師は婦人を近く招きて、當日は瓦斯罐の破裂の爲即死せし者十二名も有しが中に、珍しく命全くてかほど迄日を追ふて快方に趣かるゝも、實に幸福の事なりかし、只々何事も心つよく確に氣を持給へとて、念頃になぐさめし日より、三日四日を經てけふは頭の繃帶を解かんとて、又ジヤンヌを病室に招きぬ、ジヤンヌはしばし見ざりし夫の顔けふはまたく見られんとうれしくて、いそがはしく入立、部屋の臥床の上默然と坐したる夫の面、見れば見れば我目の迷か、夫の眼は、兩眼とも雲か霞か棚引て、わが入來しもしらぬ有樣に、やゝと計うち驚き、そりかへりし其儘、床の上に卒倒したりけり、生氣にかへりてしづかに考ふるジヤンヌは、わが部屋の中をあなたにあゆみこなたにあゆみ、もの狂しくめぐり〳〵て、エ、めくらいかにせんと、フト自らもらしたる聲におどろき恐れおのゝきぬ、男子三十六といへば、人生の前途はるかにて、花の盛りの年頃、みのらん果實をまたずして、よはの嵐に散失せにしも同じき災厄、夫は妻の爲に自らを恨べく、妻は夫の爲にかなしみ、かつはわが前途おぼつかなさを案じ初めぬ、まことや數年間、分限を忘れし奢侈も、はや夫の眼と共に皆無にせん時至しなり、夫は妻のいふがまに〳〵驅られて、制限する事なく、これにはつかの愛の糸をつなぎしなれば、夢の如き妄想を滿足させまほしと務つれど其根本の眼はしひて、ふたゝび又世の中のうるはしきをも、妻の衣服の美なるをも見んよしなく、妻は吝にすさむ心長じ、寂寞世界に安んずる心なければ次第々々におもしろからず覺て、行末を思めぐらせば、何やらんに追立られ、離別をそゝのかさるゝやうにて、しづ心なく鬱々とものいはぬ木偶の目さへ見えぬ病床の側に坐しゐたり、

論説

家裡は聖堂

畜糊子

奥古斯丁曰く。上帝若し婦人を以て、男子の主人と爲さむと企て玉はゞ、必や之を男子の頭より取しなるべし。若し婦人を以て、男子の奴隷と爲さむとすれば、必ず之をその足より取しなるべし。然れども婦人を男子の伴侶となし、同等となさむが爲めに、婦人を男子の脇より取しとなり。

それ人の快樂安寧は家の裡にあり、されば人の眞正なる性質の顯るゝもの、家裡より甚しきはなし。眞實、仁愛、正直、剛毅の顯るゝもの、家裡より甚しきはなからむ。是故に家を治るものにして、家裡に聖堂の心なく、親愛の理に原ずかざれば、その家裡は生涯苛刻にして、少しも仁恕せざる男子が專制の家たる耳。又家裡に聖堂の心なく、公正を以て其家を治めざれば、百事基礎立ずして、尊信敬愛その家中に存すべきの理あらず。摩爾曰く。良善の徳、中に充て、温厚の和氣外に顯ると。因て婦人の家にありて、閨門整肅たるは、その家裡聖堂の如くなるが故なり、これにより男子の心甚だ安寧圓滿となることを得るなり。家は婦人の邦國なり、世界なり、親愛を以て之を治め、懇誠を以て之を統べ、温和の勢力を以て之を管理す。婦人が其邦國たり其世界たる、家裡に聖堂ありて、男子外に在て事務に擾累せらるゝと雖ども、家裡の高尙なる婦人の祭主ありて、之を合同一致するに由て、その心思を休養し、精神を平定して、福祥を享用することを得るなり。詩あり曰く。

一家の歡欣せる光は、眞誠にして、且珍稀なり、憂慮多き人の上を照し慰さむ。

抑婦人極高の性質は、親愛、憐恕の情を以て、天に向て著れ出て他人に及ぼすなり、蓋し婦人は子を乳養する性を具へ。又輔助なき人を護視し、その夫を慰養し。又家を理め、靜和安樂の空氣を造り、子女をして絶好の品行を形ずくらしむるなり。

又婦人は天性慈愛、温和、忍耐、救恤あり、己を損して、人に益することを務む。寒き者は得て暖に、苦患の者は得て救れ、憂愁の者は得て歡喜す。而して是れ等の徳は、家裡の聖堂よ

り顯る〻茲なり。

婦人は災禍不幸に逢ふ人の天使と稱せられたり。何にとなれば、弱き人を助け、跌落の人を起し、痛苦艱難の人を慰撫して、暫くも躊躇せざるなり。病院を建て、病者を看護救助するは、首として婦人の事に屬す。故に凡て人誰にても患苦に遇ひし時は、婦人を喚び、その歎息を彼に訴ふるあり。それ家裡の聖堂より發する、婦人の美德斯の如しと雖ども、若し家裡にして聖堂ならざれば、爲に樂園も墮落す。それ、エデンの失樂は婦人より來り、主の御足にナルドの油を注ぎ、己が頭髮もてぬぐひ、又主の刑裏に守りたるも亦た婦人なりとす。故に家裡は聖堂たらざるべからず。



女報

可愛子編

●絢子女王殿下の御婚儀　邦彥王姉絢子女王殿下には、豫て子爵竹內惟忠氏へ歸嫁の儀御出願中なりし處、昨年十二月二十日目出度く敕許相成たり。

●大谷光瑩氏令孃　公爵九條道光氏の令息と結婚の約整ひたる東本願寺大谷光瑩氏の令孃は昨年十二月十六日上京せり。

●家永松本二氏の結婚祝宴　東京專門學校敎頭米國哲學博士家永豐吉氏と、華族學校雇松本榮子孃との結婚式は、昨年十二月十七日、米國哲學博士元良勇次郎氏夫婦の媒酌にて擧行せられたり。

●煙管製の號鐘成る　昨年十二月十六日ウエスト喪葬儀の時、婦人矯風會頭矢島楫子が打ち鳴したる號鐘は、是れ即ち津田仙氏の鑄造せしめたる煙管製の號鐘也、重量百封度、（十二貫）其の前面に彫して曰く、

この鐘はもとたばこの奴隸となりいまは自由の身となりたる一千有餘の人々のきせるなぢがれとなし千八百九十二年十二月十日東京に於て津田仙の鑄造せしめたるものなり。

更に後面には英文を以て之を銘す、去廿日橫濱解纜の「シチー、オブ、リオデヂャネイロ」號、之を剳してシカゴ博覽會に送る、今は實に大平洋の上に在り（讀數）。

●姦通問題の請願書　橫井時雄氏の姉たま子外三百三十八名は、姦通に關し、刑法民法改正の請願を衆議院に提出し、昨廿五年十二月二十四日の委員會にて院議に附するや否やを議したるに不幸少數にして院議に附せざることゝなれり、其趣意は左の如し、

請願の趣旨

一夫一婦は人倫の大本なり然るに世間往々一夫にして數婦を畜ふ者あり是れ人倫の本旨を破るものなり之を救濟せんには刑法中有夫の婦姦通せし者を罰するのみに止めず有妻の男子他の婦女に姦通せし者をも併せて之を罰して矯正すべし而して民法中に姦通とは有妻の男子他の婦女に姦通し有夫の婦女他の男子に通ずるを姦通とすとの條項を設け有妻の男子にして妾を畜へ妓に接する者を姦通となし又姦通する者は其配偶者の一方は裁判所に訴へ相當の償金を請求するを得せしめ又姦通の配偶者は離婚を請求するとを得る等の條項を設くべしと云ふにあり。

●星夫人と橫井たま女　橫井たま子外三百餘女が衆議院へ提出したる請願姦通問題に關し賛成者の巨魁たる星衆議院議長夫人は、其の運動費として金二百圓を寄

贈したりと。

●東洋英和女學校の終期會　は昨年十二月廿二日午後二時より同校に於て開かれたり。

●靑山英和女學校　にては昨年十二月廿三日閉校式を行ひ、同夜クリスマスありたり。

●海岸女學校のクリスマス　は昨年十二月廿四日夜。

●明治女學校の閉校式及びクリスマス　は昨年十二月廿四日午後五時半より同校に於て執行せられたり。

●女軍大學　有レ報曰鬪八州の探鑛女大學して諸院に遁らんと、輸出税全廢を欲して也と、夫柔能制レ剛、況乃ち玉盃有底的に於てをや、不レ如三百人軍門に白旗を不レ掲を得る乎。(二十五年十二月廿四日、東京日々新聞)

●千島艦遭難士官の病狀　日本赤十字社病院第二回卒業生(愛媛支部撰出)俊野岩子は、昨年十二月、千島艦遭難の際、愛媛支部役員諸氏と共に、現場に出張し、遭難者を擁護して、松山衞戍病院に到り、始終士官の看護に從事したるを以て、其顚末を同病院へ左の如く報告せり、(國會)

拜啓仕候時下嚴寒に向ひ候處増御盛榮奉恐賀候今般千島艦遭難に付支部長の命に依り去る三十日午前第九時和氣郡堀江沖なるラベンナー號に向け候て幹事並に醫員等と派出仕候處別に蘇生法を施すべき溺沒者無之生存者負傷の治療を補助致し同夜生存者十六名を保護し松山衞戍病院に移し去る二日退院に相成候迄療養の看護に從事仕候就ては病室看侍の模樣並に傷別容躰の大概を別紙に記載仕り聊か御參考の爲と愚筆をも不顧御報申上候謹白

明治廿五年十二月四日　　愛媛縣支部看護婦　俊野いは

日本赤十字社病院幹事岩非禎三様

◎病室看侍の狀況　松山衞戍病院に於て療養せる者十六名内二名重症他は輕症或は輕症或ひは全く負傷せざる者あり、病室は最とも廣濶にして二室を以て之に充つ其一室は則ち千島艦長海軍大尉鏑木誠氏、海軍少尉土山哲三氏、佛人機關保證人イノ氏の三名即ち支部長の指揮に依り右二氏の看侍に從事す一室は以下十四名を充つ(重症者は十四名の内混臥す)同病院看護卒之に從事すと雖も混雜の際なれば重傷者は時々之を保護せり。

◎艦長鏑木氏の容躰　以前腸胃加答兒に罹り全治せざるに際し左季肋第六肋間部を撞突左眉毛上に二ヶ所の擦傷季肋部劇痛呼吸を妨げ微に動搖するも疼痛に堪へず且つ頭痛甚だし入院後躰溫三十九度に昇騰し精神發揚して夜中安眠を得ざるも翌朝に至り躰溫平常度に下降し漸次に神意安穩患部疼痛減少す本月二日に至躰溫昇騰するなく患部疼痛は身躰屈伸を爲すも殆ど感ぜざるに至れり面部擦傷は漸次に治癒す精神爽快食慾佳良更に異狀なきに至る。

◎少尉土山氏及佛人の容躰　土山氏は兩下肢に數ヶ所の擦傷を負ひ屢起疼痛ありしも冷安法を行ふて二日間にして治せり、佛人イノ氏は腦症を起し時々眩暈を發し且つ膞骨を障害せられしも是亦漸次快方に赴けり何れも二日午後退院の際は快方に赴き殊に以上三氏は異狀なく殆ど舊に復せり。

●美人瀛車中に殺さる　昨年十二月十五日の正午頃、神奈川縣高座郡鶴嶺村下町屋と云へる所の、東海道鐵道線路の橋下に、あな無殘うら若き婦人の縊め殺されて投棄し在るを發見せしを以て、同郡警察署長新納豫輔氏出張檢視の上、電報にて横濱地方裁判所檢事局に急報せしより、翌十六日國分檢事出張して檢視を遂げ、死躰を解剖したり、死躰は三尺帶にて首を縊りありて、面部其他にも數ヶ所の負傷あり、年の頃は二十二三にして、容貌醜からず、懷中したるは娼妓營業出願書に關する委任狀、及び戸籍の謄寫にして、委任狀には愛知縣海東郡津嶋村津嶋千六百番戸山本傳次郎姉同みつと記しありたる由、仔細の事は分明ならざれども、情況より察すれば、中等或は上等の瀛車中にて縊り殺し、投棄したる者ならんが、其原因は未詳なりと、朝野新聞に見へたり。

●日本府纐紡績會社　横濱に本社を置き、程ヶ谷に工場を置く同社は、追々盛運に向ふといふ。

●千葉縣下の刺繡業　長野縣人池田袈太郎てふ人は、一昨年十一月頃、千葉縣海上郡銚子町に博愛製繡館を設立して、教師三名を雇入れ、同地方の婦女子を募集し、專ら絹手巾の製造に從事せしも、何分創業の際なればにや、應募者二三十名に過ずして、頗る微々たる有樣なりしが、今度同地方有志者の盡力にて大に之を擴張し、本銚子町飯沼に第二工場を、銚子町今宮に第三工場を、又西銚子町に第四工場を增設し、全生徒二百有餘名に達し、既に八十餘名の卒業生を出すに至れり、尚ほ追々盛大に趨くの見込ありて、各地より分工場設立の申込あり、現に香取郡佐原町匝瑳郡福岡町等へは目下設置の計畫中なりと云ふ。

●廢娼論現はる　昨年十二月十七日の山梨縣會に於て、歳入豫算經常部第八欵第七項娼妓賦金の目を議するに當り、十四番(小林)十番(依田)等、熱心に貸座敷及び娼妓賦金を輕減せんことを論ぜり、第廿五番(齋藤)更に新說を出して曰く「私も娼妓を救濟するとは至極同感ですが、私は十番等の如く賦金を少し計り減すると云ふ樣なケチな救濟法は講じません、即ち娼妓全廢の意見です、而して此全廢には少しく條件が付きます、即ち來る明治三十年十月一日迄の賦金を以て彼等の正業に就く資金と爲さしめ、同日より營業を停止すると云ふ條件付であります」と、人其の意外なる發論に驚く、而して減税論者殊に甚だし。と山梨日々新聞に見へたり。

●仰げば高し　くさの屋のよしや軒端はひきくともあふげば高きしづがおこなひ是れ往時館林藩の古家老が感吟して、孝女かんに與へし一首なり、かん女は出羽なる村山の郡黑澤村の產にして嘉永年間の生なり、德行高く孝操堅く、百里の外

加賀宰相より菓子などを賜はりしことありといふ、今回同村の渡邊久右衛門氏は先人とかん女との因縁もあり旌表碑を建設せんとて計畫し居るといふ。(日本)。

●山陽山陰婦人大祈禱會の好果(日本基督教會)　同會は去る廿三年始めて廣嶋に開會し、爾來毎年一回を定期とし、廿四年は山口に於て開會し、昨年は赤馬關に於てせり、適々會中說をなすものありて、曰く、吾等斯く祈禱會を開きて、神に切願するは善し、然し一の缺點なきにはあらざる歟、乃ち祈禱より成れる美果を、社會に向て結ばざる是れなり、故に吾等心を協せ、力を一にして、天佑を仰ぎ而して、一の事業を成さば則ち如何と、是に於てか、在周防山口の光城女學院に寄附金をなし、婦人教育の一端を補助し、向來日本人の眞母を出すこそ肝要なれと、議遂に之に決し、毎月實行することをなしたり、斯て院長は姉妹等の篤志を空しくせざらんがために、山陽中會內の諸教會及び傳道地より、石見國津和野より村田貫孃を撰出し入學せしめたり、此寄附金をなせるものは山口、吳、津和野、赤馬關の四教會にして、其他の教會及び傳道地は、目下其の準備中なるよし。

●山口光城女學院　一昨年建設以來非常の困難迫害中學術の進步日を追て盛んなり、目下生徒は僅かに二十名なるも大概れ卒業せざれば、退學せざるの決心にして教員生徒よく心を一致し相愛して勉學す、本年九月以來ミス、ピクロウ氏英學教員として來校せられ、寄宿舍に住居して、生徒と共たれば萬事都合よし、且つ此學院は百事院長の手にあれば、生徒のために都合よし、然れども校舍未だ新に成らざるは遺憾にして、不便亦少なからず新たに渡來せられしミス、プラオン氏將さに教師たらんとす、然れば更に便利を得るや大なりといふべし。(以上二件、福音新報)。

●上州前橋通信

◎廢娼請願書　上毛靑年會は、例年の如く帝國議會に廢娼の請願を爲さん爲め、旣に縣會議員國會議員等過半の調印を取りたれば、不日提出の都合也。

◎存娼論　廢娼の期近づくに從ひ、存娼の氣焰次第に勃興するは、是れ自然の勢なる乎、當地に於ても近比延期或は新設の名を以て運動中々熾なり、然れども尠しく心ある者は、一人も之れを贊助するもの無きのみか、却て壯士無賴漢の喰ひ物に過ぎざるべし杯評しあへり、以て其の一斑を推知するに足るべし。

◎知事、市長　共に廢娼の說を採て動かず、偶々存娼家之れを訪ふて意見を戰はするものあるも、皆失望して歸ると謂ふ、亦愉快なるかな。

◎故ウエスト孃　孃が來遊の目的たる万國の政府へ家庭保護を請ふの願書には、前橋基督教會の手にて多數の調印を經めたるを以て、近日津田仙翁の許へ送る筈なり、又孃の今般金澤にて永眠に就かれたる報達あるや、當地の教會員は非常に愁悼し、孃の冥福を祈る者多し。

◎女學校　何處も同じ保守的反動と共に、女學校は衰頽せしが、本縣に於ても今や唯一上毛共愛女學校を剩せるのみ、同校目下の有樣は、生徒二十餘名內外、教師六名にて、着々進步の好況を呈するもの丶如し、日本新文明の爲め欣ぶべきと思ふ(明治二十五年十二月二十二日發)

●但馬通信

◎但馬婦人會　同會は、櫻井、西山、谷野、久保、其他十數名の女史發起にて設立し、十二月十三日集會を開き、左の役員を撰擧したり、

(會長)　西山花子　(副會長)　福岡水尾子

(幹事)　久保千代子　(同)　岡本倉子　(同)舄田勝子

(會計)　五歩一光子　(同)　依田初子

而して同月十七日、福成寺に於て發會式を催ほせり、來會者六十餘名、西山會長の挨拶、久保幹事の報告、谷野郡長、西川貞子、西川節子三氏の祝文あり、岡本倉子、大森留二、小出楢子、久保莊三郎、櫻井勉五氏の有益なる說話ありたり、同會の目的は、同志婦人協同して智識を進め德義を厚うし、婦人の道を講究するにあり、而して毎月一回第一土曜日常會を開き、會の事務を商議し報告し、會員の道德學術家事技藝等に於ける所見を互に演述し、或は會長の意見により會員外有名の士女に演說を依賴するとを定む、而して更に漸次進步を重れて、學術及び飲食調理、和洋裁縫、煎茶、挿花等を教へ、幼稚園を設くる計畫をなすとを期すといふ、同會創立に盡力せしものは、櫻井勉、西山貞直、谷野孝、久保莊三郎、長田時行、パロス孃、湯谷礎一郎、太田決、福間逢三、松野旗二諸氏なりといふ

●フランシスウヰラード女史は今年の總會に於て再び婦人矯風會々長に撰擧せられたり、女史に投票せしものは三百三十八名の內三百三十三名の大多數にして、其他の役員も大抵再撰せられたり、尙同年會にては婦人の撰擧權に關する決議案を可決せり、本年の同會は殆んど婦人撰擧權に關する會議とも云ふべき程なりきと。

●ブース將軍の末女　ルーシー、ブース女史は印度に於ける婦人事業の主任たらんが爲め同地に發足する由、女史は同國に於ける救世軍の女教師と同しく印度人と共に生活し、同國の風俗に從ひて傳道に從事する考なりと。

●李鴻章婦人　は支那國中の尤も進步的なる婦人にして其勢力も亦甚た大なり旣に皐太后の顧問たりき、嘗て醫師なり宣教師の治療を受け全快したりし爲め、特に費用を自辨して病院を建築し該宣教師をして此處に居らしめし事ありき、現に基督教に對する幾多の禁令が廢止せられたるは皆夫人の力に依ると、今や夫人逝く清國の爲めに悲むべし。

恭賀新年　社員一同

○豫告

白表第三百三拾六號

一月十四日發兌

「罪と罰」の殺人罪　透谷子

ウ井ルヘルム、テル　紫苑山人

日本の思想界に於ける情　棲月子

恭賀新年　巖本善治

年暮より一月下旬迄高知縣下漫遊致居候に付參趨賀正の禮を欠き乍略儀以紙上右恭賀仕候

○豫告　近刊

櫻井明石重譯

腓立比物語

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛に感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け、又船長の助言により腓立比基督信徒の身を以て、土國人マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督敎徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を眷みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウイン族に劫掠せられ囚虜となりし時、腓立比も亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

右は譯者が三年の辛苦を經てものせし、悲むべく喜ぶべく驚くべく憎むべき境遇の變化、淚なくして讀みをへられず。譯者或人に與ふるの書に「實に小弟初めより此種の文學にならはず產の劬勞をいたし、或は車上に巢林の齣曲を繙きて、兩眼のいたくかすむをも顧みず、指頭の寒に感覺なきに至り云々請ふ不日刊の成るを俟玉へ。

○豫告

女學雜誌社

文學雜誌

文學界

來る一月廿日發兌

今般弊社發兌の各雜誌を三部に明分し、從來の白表雜誌は益々矯風的社會改良の方面に進み、赤表雜誌は益々實際的に進みて妻君の友たらんと期し、而して文學の方面には專ら此「文學界」を以て進み往かんとす、蓋し淑德涵養を說き家政育兒を論ずるは他に完全なる女性雜誌の現はるゝものありて頗る吾黨が杞憂を安んぜしむるに至れり、而して今や文學の氣運に向ふて期する所ありと雖ども、固より此重任に當るに足らず、然れども唯誠實に勤め勵みて天賦の幾分を全ふし、名を求めざる幾多隱秀才を同好に紹介し、併せて斯道の爲めに力を盡さんとするにあるのみ、願くば質實に進みて他日大手腕の出でんとを待つ。此主意を以て各々得意の題目に筆硯を研かんとするの諸君は大略左の如し

○若松女史は清麗なる好小說を專ら日本に紹介せんと勤め○花圃女史は歌話及びスケッチ等に筆を染めんと勤め●透谷子は時事文學評論等に勤められんとし●女學子は文學論說に向ふて勤め●禿木子は文學者史傳等に勤められんとし●又時々紫苑山人詩歌を詠ひ●城東生は斬新清雅の飜譯を紹介せんと勤めらる。

此他天知子等從來『女學生』に從事せし者皆此册子に盡さんとす。

定價前金表		郵稅市外共
一册	六錢	六錢五厘
六册（半年）	三十三錢	三十六錢
十二册（一年）	六十錢	六十六錢

廣告料	
一行	拾行
十行以上	一割引
二十行以上	二割引
四十行以上	四割引

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

貞婦お石

櫻井成明著

弘化三年長門萩の城主毛利侯其領周防の國吉城郡岩淵村の農伊八なる者に姓石川を賜ふ。賤農にして氏名帶刀を許さるゝは當時に在りて實に異數となす、而して伊八の此特典に與るを得たるは一にその妻お石の貞に因れり。

貞婦お石は年甫めて十七にして伊八に歸ぎぬ。伊八の兄を關藏といふ、關藏老て子なかりしかば季弟伊八を養ひて子となし、お石を聘してその妻となす。お石貞淑孝謹にして、能く伊八を助けて家事を治め、耕作に勵み、また能く關藏夫婦に事へて奉養怠りなかりき。伊八は性惰にして行修らず、力作を嫌ひ、農事を擧げて之をお石に委ね、自ら好んで商を爲し、利あらず。飲酒に耽り、博奕を好み、放蕩流連して更に家產を事とせず、屢ば人と爭ひ、惡聲日に繁く、村中呼んで疫神といふ。お石克く之を忍び、或は諫め或は勵し、夙に興き夜に寐ねて、一日も其業を怠らず。お石の父母は常に伊八の惡聲を耳にし、親しくお石の辛苦を覩て、しば〳〵離別を勸む。お石聽かず。父母強ふると能はずして、此より故に疎くなし、心にお石の終に忍ぶ能はずしてみづから離別し、歸り來るを待ちぬ。

伊八ます〳〵貧にして人に忌まる。是に於て一擧して千金を獲、以て鄉人に誇らんと欲し、銀主を語らひ、多くの炮烙を燒き、之を船に積み、親ら上乘を爲し、下關に向ひて纜を解きぬ。會ま風出で浪荒く、忽ちにして船は巖石に觸れ、炮烙破碎し、海潮漏入す。伊八等殆ど危かりしに、幸にして救船の來り助くるありて辛ふじて陸に上る。伊八大に恥ぢて家に還ると能はず、遂に亡命して往く所を知らずなりぬ。伊八と倶にせし船頭纔に一命を助かり、岩淵村に歸り、具にありしとを關藏及びお石等に告ぐ。關藏の周章お石の悲歎譬ふるに物なし。然れどもお石は心を決し、關藏夫婦を勵し慰め、自ら耒耜を執つて耕作に從事し、朝夕神佛に夫伊八が加護と歸宅との祈請を凝らしぬ。既にして村中の人伊八の亡命を知り、皆喜んで以て疫神を拂へりと爲し、村中これより無事なりといひぬ。

お石の父母は嚮にお石に離別を勸めて遂げず、常に機を見居たりしに、伊八が亡命を聞きて大に喜び即ちお石を家に呼び切りに離緣を說き、脅すに永く親子の道を絕つとを以てす。

お石泣ていはく石一旦家尊家母の仰をかしこみ、縁ありて伊八に歸ぎ侍りぬ、もとより其富み榮ふると、賤しく貧しきとによりて心を變ぜんなどゝは更に思ひもより侍らず。伊八こそ情なかれ、舅姑御がこれまでの慈愛言の葉にも盡されず、今石にして去り侍らば誰か代はりてその介抱は爲し申さむ。これよりは別して嫁の入用、夫伊八と二人前の孝行石の身に取りては當然の道とこそ存じ侍れ。おん恩愛のほど有りがたくは侍れども、何事も石が不運と思ひあきらめられ度く、よし又縁を切り歸るにせよ夫伊八出でゝ家に居らねば誰に要めてか離縁狀を得申すべき。御勘當は悲しく、御詞を背くは不孝に似たれども夫婦の道には換へがたし。それもこれも唯浮世の義理と、石が身は石次第に打棄て置き玉ひね。」父は怒りて遂にお石と絶ちぬ。

お石時に年二十二、子なし。而して艶豐秀麗、姿色正に濃なり。村中の惡少お石が寡麗を侮り、艶言を以て之を挑む者多し。然れどもお石は益す行を端くし、言を苟もせず、自ら形を損ひ、髮は束ねて油を用ゐず、衣は纔に膝を蔽ふのみ、朝には出でゝ耕作に從事し、夕には歸りて舅姑に事ふ。されば四隣目を側てゝ、村中嘆賞し、惡少等遂に愧ぢて道を避く。

既にして闕瘋病を得て痿となる、藥餌雜用太だお石を苦しむ、お石愈よ自ら勵し、その看護を姑に托し、蚤作晏寢刻苦して農事に勉む。幾もなくして姑も亦痿を病み、舅姑床を並べて臥し、事を事とすると能はず。お石艱難荐りに臻り、配慮頗る苦し。自ら料るに看護と耕作と兩つながら全ふすること能はず、或は逋租の罪を蒙るにも至らむかと、乃ち往て村役人に計り、高七石の耕田を下作に預けて、僅少なる作合を受くるとなし、力を專らにして舅姑の看護に盡し、時には一里半道の傭使を爲し、或は驛に出でゝ小揚に傭はれ、以て舅姑の甘旨に充し、家に在れば舅姑を左右に臥させ、身は央に坐して草履鞋を作り、且つ慰め且つ工す。然れども女工の獻を見ると渺く、屢ば湯藥の加減、汚物の洗滌に時を費すが爲めに饑貧日に迫り、舅姑の晨膳夕羞も纔に粥を啜るに止り、お石みづからは食する爲して食せざると屢ばこれあり。

一日薄暮の頃お石は人に傭はれて出でぬ。舅姑のこと心に關れど緊要の事に時つひえて、その夜二更過ぐるころ漸く歸るとを得、常の如く戸外より先づ聲かけ、石こそ歸り侍れ」

といふ。應ぜず。お石異み、心悸き、急ぎ戸を排して入り見れば舅姑は相向ひて泣きをりぬ。お石驚きて其故を問ふ。關藏涙を揮つていはく、我儕夫婦いかなる宿業のあればか、伊八の不所存より今日の難義に遇ひ、かてゝ加へて二人相並びて業病に枕に伏しぬ。この年月そなた嫁女一人の介抱うけて今日までの生命はつなぎたれ、今宵しも嫁女がいつになき歸りのおそき、若しや我ら夫婦をすて親里に歸りしにはあらぬかと婆が歎くに我もまた不圖疑ひの起るにつけ、よく〱思へば此年ごろの艱難辛苦なか〱眞實の娘とて是程の介抱屆くべしとは思ひも寄らず。左は去りながら本はといへば他人なり、永の不自由、その間に退屈の心の起らむも計られず。現在の子、弟にすら棄てられし我儕夫婦今更誰に棄てられしとてその人恨めしとは思はねども、嫁女が万に一つ歸り吳れずもあらば、足腰の起たぬこちら二人、袖乞ひ乞丐もならず、此まゝ此處に餓ゑて死なねばならぬかとうら悲しく、思はずもこゝに泣きをりしに能くこそは戻りくれたれ」と涙片手に物語れば關藏が妻も唯手を合せてお石を拜するのみ、物も得言はず、復び喜泣に泣きゐたり。お石は之を聽きて心刺さるゝが如し。涙を飲みて故に笑を粧ひ、舅姑を慰め强ふし、藥を進め、常の如く央に坐して草鞋をつくり、世の新聞など物語して夫婦を樂しましむ。既にして夜もいたく更けぬ。疾く息みねとの命にお石は薄き袷襟のもの被ぎて處も去らず臥しぬ。關藏夫婦心を安んじて一睡し、覺むれば則ちお石の衾中に歔欷の聲あり。關藏等大に異み、お石を呼ぶ。お石纔に應へて、唯」といふ。何故に泣けるぞ」と問ふ。床に就けども目は合ひ侍らず」と答へぬ。關藏また、何故に目の合はぬぞ」と問ふと再三。是に於てお石身を起して坐し、飮泣していひけるは、されば伊八殿家を出て玉ひしよりすでに六年、踪跡いまだ知れ侍らず、里の親たちよりは屢ば緣きり、歸り來れと申し侍り。一たび嫁ぎては出るにも歸るにも此家のほかに家とては石には持ち侍らず。古より布は緯から男は女からとも申し侍り、伊八どのゝ失踪もとはといへば石が奉仕の足らざりし爲め、何を面目に親里には歸り得らるべき。それのみならず父御母御前御大病のゝちは猶更に御側は離れまじと愚なる心のかぎりは御介抱申せども、折り〱の傭れ仕事に手のひけて、誠悃ならぬとの多かるを日頃くるしく思ひわ

づらひ侍りしに今宵のおんうたがひ、受け申し侍るも石が全く届かざる身より出でたる過失なれば如何にせば二位が御心を安め得らるべきかと思ひめぐらし侍りては更に目も合はず、果は悲しく打泣きしに、いざとき御目をさまさせ打驚し奉りぬ。生れつきの愚はおん指圖を受け侍らねば更に心の注くべしとも思はれざれば、これよりのゝちは石が足はぬ所は如何樣にも指示し玉ひね、心ばかりは疑ひ玉ひそ」。いひをはりて打伏せば關藏夫婦深くその孝貞に感じ起たぬ腰をゐざりてお石が背を挾み撫で、相互に自ら責め且つ慰めて、その夜はつひに明けぬ。お石はこれより固く傭使を辭して舅姑の側を去らず、たゞ近隣より衣服の裁縫を受け、辛くその日の煙を立てぬ。

關藏病に伏してより既に三年、甚だ無聊に苦しむ。家もと眞宗の徒なり、一日その友來りて、京都本願寺の使僧隣村に來り說敎すと告ぐ。關藏歎くに身の便ならざるを以てす。お石側に在りて之を聽き、去る御思召のありたらんには疾にも御伴いたさんものを、今より往くとも遲くはあらじ。いざ給へ」と坐を起てば關藏驚き、またその勞を憐み、固辭すれどもお石は聽かず、直ちに裝を整へ、しばし姑を隣人に托し關藏を負ひ、隣村某寺に詣り、座を設けて臥さしめ、走り還へりて再び姑を負ひ、往きて關藏の側に臥させ、己もまた給仕しつゝ使僧の法話を聽きぬ。法話をはれば則はちまた姑を講中の知人に賴み置き、關藏を負ひて家に歸り、更に走り往きて姑を負ひて歸る。道途片程一里あまり、お石一日往返六回に至る、見るもの驚嘆せざるはなし。而して啻に一日のみにあらず、法座の期滿つるに至るまで、風日雨天を論ぜず、必ず舅姑を負ひて詣るに、人みな其高行に感じ、爲めに姑を負ひ、以てお石の勞を助く。使僧お石の行を視て異となし、講頭上田少藏に問ふて其實を得本願寺に還るの日具さに狀を法主に聞す。法主聽きて大に之を賞し、その翌年使僧再下の時お石に美菓一折、關藏夫婦に法名を親ら書し、齎らし往かしむ。かくて法座開けぬ、お石また舅姑を負ふて來る。使僧乃ち命を傳ふ。お石は感泣し、關藏夫婦は謝する所ろを知らず、亦泣く。聞く者歎賞し、遠近稱せざるなし。既にして事毛利侯の聞に達す。侯乃ち近臣楊井盛之を遣はし、就て糺さしむ、是に於て盛之少藏を伴ひお石の家に就き、親くその苦節を問

見し、還りて狀を具して申す。侯感賞し、即ちお石を秣城に召して謁見を許るし、その貞孝を賞し厚く物を賜ひ、關藏夫婦には其一生二人扶持を賜ひ、以て老を養はしめ、且つ凡て耕田の租を免るす。是に於てお石の名藉くと甚しく、顯貴のこゝを過ぐるもの多くはお石を本陣に召して引見し、物を賜ふと數を知らず。

是より先き岩淵村の人お石の苦節を憐み、相計りて竊に伊八を求め、物色はなはだ勉む。會ま伊八の長崎に在りといふ者あり、即ち人を遣はし長崎に往かしむ。其人果して伊八に逢ひ、告ぐるに關藏夫婦の痿疾、お石の貞孝苦節を以てす。伊八はお石の猶家に在りと聞きて大に驚き、且つ感じ且つ愧ぢ、辭するに我が無似なるを以てし、貨殖して錦を飾るに非らざれば歸らずといふ。其人訓諭百方、遂に伊八を拉して還り、村に到る。時に村内男女老少相集り、喧囂甚し。異んで之を問始めて其のお石の秣城主に謁し、賞を得て歸村するなるを識る。伊八色然として益す驚き、感激やまず、深く我が非行を悔い、家に歸りて關藏夫婦に面し、泣てこれ迄の不孝を謝し、厚くお石多年の辛苦貞操を勞ひつ、是れより心一變してお石と共に能く關藏等に事へ、農事に勵む。かくて關藏夫妻壽を以て終る。伊八お石益す行を修め業に勉め、一郷の矜式となる。領主之を嘉みし、石川姓を賜ひ、帶刀を許るす、蓋し異數なり。

お石の德すでに伊八を化して孝子たり貞夫たらしむ。隣家に熊女なるものあり、深くお石の行に服し、其親に事ふると至らざる所なし、亦孝を以て聞ゆ。又小野某なる者あり、其一女を携へ來りてお石に面せしむ。其女時に年十四、國風を詠じて以てお石に贈る、

立ちよりてしばしなりともならはめや
親につかふる人のこゝろを。

其の化の及ぶ所一にして足らず。

伊八病んで死す。お石七十餘歲にしてまた亡き數に入りぬ、時に文久二年十二月十四日なり。後ち慶應元年上田光美碑を建て永くその婦德を表彰せり。

明石子曰く夫婦は人の大倫なり。その職をいへは婦は夫に適ふて之を助くる者なり。故に夫唱へて婦隨ひ道以て全く家以て齊ふ。その德をいへば夫の剛は婦の柔によりて化を受く

ると多し、故に高明は柔もて克め男は女に由りて品を成す。世衰へ道微にして、人夫婦の道を講まず、苟も合ひ苟も離れ、夫婦相待つこと紙よりも薄し。罪これを一人に責むべからずといへども素助者の職に居り、化して品を成さしむる德を稟くる所の者にして合離を苟もする此の如くんば夫婦の道は其れ遂に荒廢せんのみ。夫れ婦にして誰か其夫を愛せざるものあらむ、而してその道を知らざるや、瑣事末節の適ま見を異にするにあへは則ち相怒り相罵り、怒罵の極その合離を言はざるものは少し。能くその夫に和し、之を助くるものは之れ有り、而して舅姑に事ふるに至りて、能くその道を盡すものは少し。能くその夫を愛すれども報いられず、能く之を助くれども省みられず、且つ疎んぜられ且つ棄てられて、十年の久しきその道を改めず、而して癈疾不具の舅姑に事へて温凊の養を缺かず、つひに成品適助の德と職とを全ふせしお石の如きに至りては天下を擧げて幾んど希れなり。易に曰く坤道は女を成す。又曰く坤は至柔にして動くや剛く、至靜にして德方なり。お石は蓋しその人歟

附錄

過孝婦阿石家賦

楊井蘭洲

巖淵之村一茅廬、道是孝婦阿石居、偶以官事過其地、土人嘖々說稱揚、作賦題門親相見、膏沐無施垢上面、一種婉柔不消磨、拜我慇懃謝垂脊、自陳伉儷元不倫、菽水朝夕奉舅姑、一旦良人抱冤枉、遠去他邦音托無、十年孤燈守幽獨、室空曾無擔石蓄、裁縫紡績仰人儲、千辛兌得一斗粟、不幸舅姑脚病瘻、枵然在床難可醫、千金求藥道安在、一笑承歡竟無期、溫凊殺貧唯竭力、欲訴蒼天々悶極、唯願良人早歸家、同心或猶可共艱、我聞其育涙如抽、至性如斯世罕儔、盍報世上滔々者、激揚清波變濁流、里正少歲夙好善、一々上狀請旌顯、我公有命督有司、賞賜再三重勸勉、恩輝熀々照鄉閭、政化一單及窮民、聊以蕪言紀此事、留待他日輶軒人。

孝婦阿石碑文

近藤芳樹

いしは此里の女なり家貧しくて朝夕の烟もたてがたかりしが夫なりはひのために旅にゆきてかへらずいし獨り舅姑の足なへのやまひにいたつけるを晝は背おひて寺に詣て夜は抱きてかはやにゆかしめなど手弱女の力にたへ難き事をもしつゝ雨もり風あるゝ窓のもとに麻績糸くりて年あまた過にけりその行ひ官府にきこえてみつぎを免るし物を賜へるみうつくしみおぼろけならず終に夫もこれを傳へきゝてひさの國より歸り來てもろともに孝養をつくしけりかくてふたりの親みまかりけるのちに民籍にはたぐひまれなる氏をさへ賜りていさゝ家の門を照らし旌はせりこれ弘化丙午の年になんありける隣にくまさいふ女ありいしが行にならひてたらちねにつかふることまめなりけりあはれいしが德孤ならればたゞ熊女のみならず東いは國山を極め西さよらの擬をつくして人の子人の妻たらん者みなめでまれびぬべくこそ。

いは淵のそこさへてりてしつく玉
石さはいはゝおはれその玉

おうな

テニソン氏作
若松しづ子譯

エニや、さやうかへ、ウィリもとう／＼長逝てしまひ升たか、艶／＼と色白で、骨格もシッカリと天晴れな男で有つたがネ。ウィリの嫁が手紙をよこしたのですネ、さやうか、あれは餘り利巧過る方ではなかつたよ、ウィリにはふつり合な女房でネ、だが私のいふヿを聞かないでしまつたのです。

エニや、聞いておくれ、あの嫁のおやぢといふは仕方のない人間でネ、あと先の分別もなく、酒びたりになつて、果ない往生を遂げましたよ、尤も器量は好のさ、好い器量では有つたが、わたしは不承知だつたよ、併し倅がどふしてもいふヿを聞かないものだからネ……………ア、さういふ中にモウ先へいつてしまつたのか、自慢の總領息子で、しかも兄弟中の花といわれたつけが、うちのウィリ斗りは人に投げられたヿがなかつたのだ、立はだかつた處が大磐石の樣でネ、あのお醫者がいつたヿだよ「七夜の赤ん坊のにこの足を見てくれ、いくら尋ねても、これにつきかふ赤子は一寸マア近村には見當らん請合だつてネ……………足も丈夫なり、手も利いて居たが、口數といつては、誠に寡ない物靜かな男で有升たよ、わたしがあとへ殘されるといふ筈はない、割には夭死をした樣だがネ、さらばといつて、涙はこぼされませんよ、わたしも先は短かい、死んで却つて早く顏を合せられる位だからネ、この通り離れて居ては。

エニや、なぜさうわたしの顏を眺て居るのだへ？わたしが頑固で、不人情とおもふのだらうが、わたしもモウ年をとつて、子供はみんな先へ行つてしまつたからネ、ウィリ斗りではない、外の子供の爲めにも泣ませんよ、おまへたちの年にこそ泣くヿは澤山あつたが。

思ひ出すがネ、おまへのおとうさんと口論をしたヿが有つてネ、イヤ、ナニ、おまへのおぢい樣とさ、つまらぬ誹謗を言われた斗りにネ、其時には大分泣いたつたッけよ、ア、それも七十年といふ昔しの話しさ、七、十、年といふ。

そも／＼其起りといふはネ、わたしの從妹で、ヂェチといふ女が此時分近くへ引越して來てネ、ヂェチは兼てわるいヿのあつた人といふヿは、わたしが疾から知つて居たけれど、わざ

と何もいはずに居た處が、其人の腹くろさ、わたしに有もせぬ名を着せたのですよ、どふも舌は燒き盡す火といふヿがあるがネ、實に其通りだネ。丁度其ヿのあつた時分教會の牧師さまが今いづた處を題にして講釋をなすつたが、其時仰つたよ、實の雜づた嘘こそ嘘の中でも一番罪が深いつてネ、一から十までいつはり斗りの嘘はまだしも敵し易いが、實が幾らか雜つたのは打勝に骨が折れるつて。

此おばあさんがお嫁になる約束をしたお人も矢張りウィリといふ名だつたがネ、其お人が此時分一週間の餘も家へ足踏をなさらないものだから、五月の中半で、花も鳥も澤山あるのに、わたしの心には萬づ枯れ〳〵て見へ升たよ、ヂェネのこれまでをよく知つたわたしが却つて毒ある其舌にかゝつたと思つてネ、だが、エニや、人の名を汚したとて、自分の名が清くなるものでは決してないからネ。わたしも眼を泣つぶすほど泣いてネ、ある夕、フト外面へ出て、門の側へ佇んで居ると、折ふし月が野火の樣に東の空を燒して、谷間から登る處で、直側の立樹には郭公の聲で頻りに囀つて居升たのさ、其中俄かに聲を止めたと思つたら、ウィリさんが門まへを通るのだよ、ウィリさんはわたしの居るに氣付かず居る樣でしたが、見ればヂェネが其腕にすがつて居るのだよ、わたしは餘りのヿにあと先の考へもなく、ツト走り來て、我知らず、心にある丈をいつてしまつたのだよ。マア此年になつてさへ馬鹿なー思ひ出せば、腹が立升よ………ウィリさんは天晴れ雄々敷、今さらヂェネを見下げ果てた女とイヤヽヽ兼ねぬ勢ひに、蝮といつても飽き足らぬヂェネが私しにわざとうや〳〵敷辭儀をしてネ、先へ行つてしまつたのだよ。そこでわたしがあとへ殘つたウィリさんにかふいつたのだ「モウ〳〵あなたとはお別れしませう、百年たつて、もあなたがわたしの潔白を信じて下さらなければ、矢張り同じヿで、迚もわたくしを愛し遂げて下さるヿは出來ませんてさ。すると振り向いてわたしの顏をヂット見たウィリさんの眼は月あかりに涙が一杯湛て居て、かふおいひのだ「これさ、わたしはあなたを愛して、決してモウ疑ひはしません、ヂェネなどがたとひあなたをよくいはふが、わるくいはふが其には管つたヿはない、早速婚姻を整へて、嬉敷月日を送らふでは有ませんかと、おいひだけれど、わたしがまた「婚姻も好けれど、わたくしはまだ申度ヿが

あるのです、どふもあなたは先へよつても、矢張り人のいふとを聞いて、嫉妬を起し、わたしを邪慳になさるだらうとおもひ升といふと、ウィリさんはわたしの側へよつて、兩手でしつかりわたしを抱へ、いゝや、決してさういふとはないから安心して、といひなさつたのだよ、それが今となつては七十年の昔しだよ、七、十、年…………

それで、二人は婚禮するとにきまり、わたしは其時藤紫の着物を着て、會堂の番人までが一生懸命で鐘を鳴らして呉れ、万事めで度濟み升た。さてわたしが最處に產んだ兒といふのは死躰で有つたよ、實にヰ、エニや、一生の中には蔭あれば陽あり花あれば、剌ありだよ。死といふことを考へたは此時が始めてゝあつたよ、人間の形ちがあつて、一度も空氣を吸たとのないか可愛いゝ身躰を其まゝ横にしてあるのを見て、エンや、お嫁になつて一度も泣いたとのないわたしが其日始めて子供の樣に泣升たよ。なぜかといふにヰ、いとしや其兒は是非に生きやうと煩悶たものと見えて、可愛いゝ其顔に苦痛があり〳〵と現はれて居たからヰ、死んで靜謐な其躰を見て、其苦痛も煩悶も、ナ、益にたゝなんだと思ひ、間もなく顔を合せるものとして、この通りウィリの爲には涙をこぼさなぬに、生れぬ前に死んだ兒の爲には子供の樣に泣升たよ。併しヰ、夫はよく慰めてくれ升たよ、わたしのいふとは滅多にいけないと仰らず、誠に男らしく、わたしどもには親切で有つたが、其代り、亦自分の言條は立て通すといふ處もあり升た。嫉妬ら敷ことは一度も仰らず、共に悦ば敷年月を迎へ送り升たが、其中夫も先だつておしまひなされたのだが、此時も泣ないといふのは、わたしが行も近い中と思つたからであらうよ、併し其時一處に死ぬるとを神さまの御心で有つたなら、尙さら幸であらうと思ひ升たヰ。どふも此時分から少しづゝ疲れた樣な心地もして來て、共に永い眠りにつけたらと願つたがヰ、それさへモウ十年斗りまへだよ、覺へ違でなければ、たがヰ、エニや、子供たちはみんなわたしの側に居る心地だよ、お前と同じ名の、エニといふのは二ツの年失なしたがヰ、今でも足まめにパタ〳〵とそちこち歩いて居る樣で、心のまゝに來たり往つたりして居升よ。ハンといふのはツイ向ふの田地に往つて居るし、チヤァンといふのもあの山を耕やして居るよ、此二人の聲も始終耳に聞こへて居升よ。二ひき引

の錫に調子をとらせて、歌をうたひ、ツイ戸の側まで來ると思ふは夢か現か分らぬ樣ですよ。みんなが來ては、わたしの側へ坐つたり、臥の週りに往來したりするからネ、生きて居るものか、死んだものか判然せぬとが度々有升よ。だがよく〳〵考へて見れば誰も生殘つたものなく、ハンは六十でいつてしまひ、おまへのおやぢは六十五、總領のウイリは七十に近かつたが、わたしはみんな赤ん坊の時から知つて居たので、あれまで成人したのだよ。

モウわたしの年になれば、悲むともなく、誠に平和なもので、又元生れた家に戻つて、夫も子もない昔しに立歸る心地になるとも度々有升。隣り近處の人たちが來ては笑つたり、世間話しをしたりして、わたしも同じ樣に雜つて笑て居るが、久敷昔しのとで、思ひ出しては笑ふとがいくらも有り升。牧師さまが仰る通り、自分〳〵の罪業を考へれば、悲しむ筈ではあるが、身に餘るお慈悲をおもへば、心はいつも平和で、命の終る時も一生の善惡を審いて下さる者は人でなく、矢張り神さまだからネ、此御本にも神の仰は有難いと斗りですよ。老年は無事、平和な時で、苦痛といふものは一向なく、わたしなどの生涯は殊さら幸といふものだがネ、モ一度世渡のし直しをして見度とはどうも思へないよ。どふやら少し草疲れた樣で、早く安樂になり度、息み度と思ふ斗りだネ、おまへの年にこそ泣くとも多くあつたが。

そんならウイリも行つたかへ、兄弟の中で花といはれた一番息子のウイリも、併し本の一時先へいつたのだもの、ウイリの爲に泣たてるとがどうして出來ます。一寸此部屋から次の坐敷へ移つたのだもの、わたしもツイ間もなく、あとについて行くのだから、悔む眼も何もありませんよ。ウイリの嫁が手紙をよこしたとかへ。あれはどうも發明な方ではなかつたよ。エニや、眼鏡をとつて來ておくれ、まだ眼が見えるのは有難いとだよ、わたしが眼を閉たあとで、おまへ〳〵讓るものとては、本のしるし斗りだが、先づ今暫らく、おばあさんと一處に居ておくれ、久敷とは有ませんよ。

女學雜誌社出版發賣書目錄

著者	書名	冊數	正價	郵税
鈴木弘恭大人述	文法口授	全	金拾二錢	金二錢
松山高吉君著	邦文學	全	金二拾錢	無郵税
鈴木弘恭大人述	雅俗諸體作文口授	全	金二拾五錢	金四錢
同講述	標注徒然草講義	一	金八錢	金二錢
同著述	參考標注徒然草拔萃	全	金貳十錢	金四錢
同著述	參考標注竹取物語讀本	全	金貳拾錢	金四錢
同著述	標注參考土佐日記讀本	全	金二十錢	金四錢
同著	女學校用讀本國文抄讀	五冊	一冊金二拾二錢宛	一冊金四錢宛
池袋清風大人著	淺瀨の波	二冊	金三拾錢	金四錢
松田敏足君著述	明治女小學躾草	上下	金四拾錢	金六錢
香月恕經君著	記事論文女子文例	全	金二拾二錢	金四錢
木村熊二君著	漢文抄讀	四冊	一冊金二拾四錢宛	一冊金四錢
横山雅男君著	婚姻論	全	金十六錢	金四錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	全	金十錢	金二錢
三島通良君著	母のつとめ	母の卷 子の卷	金七十錢	金六十錢
女學雜誌社編輯	兒育草	全	金二拾錢	無郵税
同編輯	女子生理	全	金二十五錢	無郵税
同編輯	子供のはなし	全	金五錢	金二錢
村木經箴君述	家政要旨	全	金五錢	金二錢
藤尾錄郎君著	家計簿記法	全	金二十錢	金四錢
透谷子著	蓬萊の曲	全	金八錢	金二錢
巖本善治君著	女學叢書木村錄子傳	全	金八錢	金二錢
安東松治郎君著	貧兒の教育	全	金六錢	金二錢
井上藤平君編	訓蒙繪双紙猫と鼠	全	金五錢	金二錢
久野正香君著	看護婦美談	全	金貳拾五錢	金六錢
巖本善治君著	吾黨の女子教育	全	金拾錢	無郵税
坪谷善四郎君著	日本女禮式	全	金五十錢	金十二錢
小野鐵之助君編	かな習字帖	三冊	一冊金拾錢宛	一冊金二錢宛
同編	文かきふり	二冊	金三十六錢	金六錢

增訂三版

故近藤賢三君　高橋要亮君同著

經濟秘法

廢物利用

上下合本

正價金三拾五錢

郵稅金四錢

目次

其他百四拾六件

發賣

東京市麹町區
下六番町六番地
女學雜誌社

福音新報

毎金曜日發行

福音新報は解し易く讀み易き文章を用ゐ、凡そ日本の基督敎徒として心得へきと知るべきとを忠實に報道論議し、又古の名士偉人の傳記を掲げて修德の摸範となし、家庭の淸潔親睦健康愉快を助くへき種々の手段を説明し、我國東西南北各地方の敎狀、將又海外宗敎社會の動靜波瀾は、其重要の者を撰で報知を與へ、新書の出版せらるゝあれは、讀者か購讀の上にて失望せらるゝとなからんか爲め本紙先づ公平の批評をなし他の宗敎雜誌の所論にして、參考すべき者あれば、拔萃して其の要點を示すべく、要するに我國基督敎社會に有益の機關たらんとを期する者也、今や記事躰裁共に粗ぼ整頓し以來も社中一同益々奮勵する所あらんとす。願くは諸君の協賛を得て愈々發達するに至んとを。

定價一部金二錢五厘○十三部(三ヶ月分)卅一錢五厘○廿六部(半ヶ年分)六十錢○五十二部(一ヶ年分)一圓十四錢
府外は一冊に付郵税五厘を要す

東京麴町區三番町三十五番地
發行所 福音新報社

池袋淸風大人の著日本綴上下二册

和歌の知るべ

正價金三拾錢 郵税金四錢

浅瀬の波

此書は有名なる池袋淸風大人の著にして、案山子社中の藏にかゝるものにして、我社出版の百人一首講義と共に歌道自修の御仁には頗る有益なるものなり、此道に志す御方は是非一本を坐右に供へ玉へ。

東京麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

○● 廣告 ●○

天田儀八君編纂

日本全國 教會便覽 全

正價廿五錢
郵税四錢

一月十日より發賣す

各教會は皆な此書を備へざる可からず各キリスト教主義の學校は悉く此の書を求めざる可からず
各キリスト信徒は凡て此書を一覽せざる可からず
各教會の事務員役者は是非此の書を所持せざる可からず
教會の大勢を知らしめ學校の廣告を爲し信徒に便益を與へ事務員役者之事務上の敏活運動上の便利を與ふる者は誠に此書なればなり
割引十部以上纏めて購求の御方には無遞送料二十部以上二割引

横濱地藏坂中央
發賣所 福音舍

口上



東西〳〵毎〻御ひゐき御引立を蒙り難有御厚禮奉ㇾ上升偖此玉子ぬかの義世の御高評と共に益販賣高を增加致弊店の面目不過之候然るに此機に乘し種〻紛敷もの現れ候に付今般更に商標を登錄致一は摸造品の現出を防ぎ一は御愛求各位の御信認を得倍舊の御愛顧を蒙り度茲に御披露旁奉希上候

登錄 商標

冬は御ひつ用きめのよくなること請合



いかほどあれ生の御方にても此玉子ぬかを御用ひなされば得ばしぜんにゆで玉子のむきたての如くになり升御愛客樣の御好に付

年始の御進物用に美麗なる折詰調進仕候間御用向被仰付度願上候

●一個十度用定價金一錢五厘　折詰一個金二十錢

發賣元　東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛

特約大販賣所

池の端仲町守田寶丹○村松町寶丹水岩濵○元大坂町淸婦湯高木○上槇町萬金膏安川○馬喰町一小町水平尾○本町四英藥松本○瀨戸物町玉の艶玉霞○小網町四氣轉丸黑澤○兩國廣小路五臟圓大木○銀座二精錡水岸田○十軒店蚤取粉森谷○銀座三丁目㊇本店○木挽町三丁目歌舞伎座橫町峯島快心堂○橫山町一丁目近源○同町洋物店杉谷○同町小間物店龜忠○同二丁目鼈甲店上金○同二丁目脇田誠眞堂○同三丁目洋物店越兼○檑町四丁目丸見屋○通り油町小間物店村藤○馬喰町一丁目長瀨○通鹽町小町ふし山田篤藏○通旅籠町網代町ピットル松田商店

兩國藥研堀町 高橋藥舘　坂本町角 德田多助　新右衛門町 はたや　通一丁目木原店 丸濱支店　大傳馬町二丁目 岩濱支店　馬喰町二丁目 岩田支店　同町加州紫雪 龜州屋　小網町四丁目 上ぜ屋　南傳馬町一丁目 い屋　竹川町小間物店 丸泉支店　八丁堀大通り 和木治堂　神田鍋町大通 大澤盛助　小柳町藥舖 明條堂　鍋町洋物店 中澤　神保町キナピットル 信盛店　同町角 伊角堂本村　錦町 三郵便扱所吉　猿樂町 樋屋本や　一橋通町小間物店 翁屋本店　南神保町 茂村千金丹　小川町通り角 よし　猿樂町二丁目 小林　神保町五十稻荷前 帝國堂　神田仲町一丁目

松宮町寶丹支店　本郷三丁目角　同五丁目藥舖　同眞砂町　下谷車坂町角藥舖　下谷車坂町　同町藥舖　柳橋鶴㐂の家　淺草藥研堀角藥舖　本所三ッ目通り　深川猿江町六番地　同仲町小間物店　芝櫻田伏見町　同今入町藥舖　同備前町藥舖　芝神明鳥居内　飯倉四ッ辻小間物　同町唐物小間物店　麻布永坂町二保玉散　同兵衛町二丁目　三田四國町店物店　同町油小間物店　三田二丁目

長尾　かれや　高島　尾澤　さくら　宇かや　吉田龜太藤　松山白　野村　羽鹽物屋　中卯のや　大坂屋　豐田井　平田　樺　岩本新兵衛　德井　万屋　照井　岩本支店　今井　山崎屋　唐こく屋

伊皿子臺町角　赤坂一ツ木角　四ッ谷御門外物店　同傳馬町小間物　麴町三丁目赤蛙丸　三番町通り藥舖　牛込宮比町藥舖　小石川すわ町　蠣殼町二丁目　牛込築土町藥舖　淺草茅町角同　芝三田一丁目角　深川土橋丁番向　淺草駒形町　同すわ町　同黑船町藥屋　同吉原大門前子洗粉宮玉　同三筋町角　本郷湯島天神町　同本鄕砂町　同濱町一丁目　根岸上野四丁目　同西尾町二丁目　同野毛町二丁目

淺子彌助　松屋　灰吹屋　山形屋　田宮　雨尾澤　花堂　山田藥店　尾澤　尾澤　万屋井　なかみ　同紅や　みさん　中村　かめや　大井本　淺子　鈴木　信長　近江屋

各府縣下確實品販賣有名舖又は小間物店にて取次販賣仕候間御最寄にて御愛求奉希上候也

本誌の大改良

窮陰聢りて、瑞氣四海に充ち、乾坤一新して、鳳暦茲に改るの期、夫れ近きにあらんとす。而して我が同志社文學も亦た、之れと同時に、一大改良を施し、一大進歩を加へ、以て大に讀者諸君に報ゆる所あらんとす○同志社文學には社會の表面に現はるゝ時事問題は勿論、政治敎育宗敎文學經濟其他百般の問題を論じ殊に議論精確を宗とし𥈞々たる社會の昏夢を警醒することを期すべし○特別寄書には滿天下の大家名士を網羅すべし其名論卓説を掲げ以て江湖の視聽を聳動することを期すべし而して同志社の敎授諸君を始めとし世の大家名士にして既に特別寄書家たることを承諾せられたる方も尠からざれば其の雄渾の篇正大の論紙上に跳如たるの期夫れ近きにあらん乎○詞草園には花笑ひ鳥謠ふの觀を具へ雲往き水流るゝの品を備へ蔚錦裁誘光耀陸離日を奪ふの藻葩を萃むることを期すべし○雜錄には鋭鋩劍の如き寸鐵より片言能く人の龜鑑となるべき漫錄隻句能く人の心事を穿てる鎖談等より有益なる統計等をも掲ぐることを期すべし○時事には敎育、政治、文學、宗敎等を始とし社會百般の出來事を簡短明瞭に報ずることを期す○通信には海外の社友及日本各地の社友よりの通信を載すべし○本誌が一度改良を加へ、花實双備するに至らば、山高く水清き更に美觀を加へ、嵐峽三尾の紅黄、鴨水東山の月雪と共に、天下の耳目を聳動するに至らむ○編輯員には磯貝雲峯、松浦美軒、柏木義圓氏等あり小崎弘道氏も亦た毎號椽大の筆を揮はるゝ、筈となり米國哲學博士湯淺吉郎、仝博士小野英次郎の諸氏は社員として力を盡さるゝこととなれり、讀者幸に刮目して待て。

明治廿五年十二月廿日

同志社文學社

史海　第拾九卷目次

批評欄内 相變らず騷然たり ◎挿畫 持國天

（定價）一冊金九錢。十冊前金金七十五錢。市外は一冊に付郵稅二錢增◉毎月一回發兊

發行所　東京京橋區彌左衛門町　經濟雜誌社

大取次　東京。東京堂、巖々堂、東海堂●大坂。岡島新聞舖●京都。便利堂

拙者旅行中ニツキ甚ダ欠禮ノ至リニ存ジ候得共以紙上辱知諸彦へ新年ノ御慶日出度申納候

明治二十六年一月一日

飯野吉三郎

●謹賀新年祈大方各位之萬福●

書籍　新聞　雑誌

勉強　廉價　迅速　販賣

京都　新町通竹屋町南

便利堂

●倍舊御引立の程偏に奉希候●

謹で新年を祝し併せて愛顧諸君の清福を祈

ケイセイ社書店

電話九六九號

内外 國醫學士出張

診察 午前八時至十一時 日曜休

赤坂區氷川町

赤坂病院

古烟管を以て鑄造の鐘

右は兼て廢烟家諸君より御寄贈の烟管を以て昨冬十二月十日鑄造（目方十貫目）ウエスト孃葬儀の節始めて之を撞き今般米國シカゴ府閣龍世界大博覧會へ出品し後に同府婦人禁酒會館へ寄附の手續に相運び申候就ては烟管寄贈各教會及各位へ一々御報可申上筈の處御多人數にて其儀に難及候間此段紙上を以て御報告申上候

東京麻布區本村町

津田仙

◉●◉毎月一回（十五日）發行◉●◉

（●速記彙報●）

正價一冊八錢　十二冊前金九拾錢　全國無遞送料

速記彙報第四十七ニハ井上渡邊二大臣演説、評福羽美静澁澤榮一二君ノ演説速記、島田三郎君ノ演説ニ關スル論説、世界博覧會出品ノ帝國議會速記整頓法説明書、兵庫縣會富山縣會ノ筆記ニ關スル事項、先見投票募集ノコト内外速記近況等ヲ掲グ

東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

女學雜誌大取次所

- 東京市本町三丁目　瑞穂屋卯三郎
- 同 錦町二丁目　武藏屋藤藏
- 同 尾張町二丁目　東海堂
- 同 彌左衛門町　瀨々堂
- 同 表神保町　東京堂
- 同 出雲町　警醒社
- 同 鐵砲町　指金堂
- 同 元富士町　盛春堂
- 同 雉子町　園々社
- 福岡縣福岡　積善館支店

- 神奈川縣橫濱市　共同新聞發賣會社
- 同 同　万字堂
- 京都佛光寺烏丸　東枝律書店
- 同 新町竹屋町　便利堂
- 大坂本町四丁目　岡島支店
- 同　福音社
- 神戸元町四丁目　福音社
- 函館市　福音社
- 熊本縣熊本　草野門平
- 京都新町二條　大黒屋書店

女學雜誌市內賣捌店

- 麹町區上六番町　日盛堂
- 同 三番町　梅仙堂
- 同 同　福音舍
- 同 飯田町　三文字屋
- 同 同　洗心堂
- 神田區神保町　松江堂
- 同 同　青柳堂
- 同 雉子町　大塚書籍店
- 牛込區神樂町　積善堂
- 同 同　正導舍
- 同 肴町　深田彌兵衛
- 本郷區眞砂町　文壽堂
- 同 同　就本堂
- 同 富士前町　解明堂
- 同 同　盛春堂
- 同 二丁目　古河屋

- 下谷區東黑門町　三一堂
- 神田區松岡町　山口次郎
- 同 旅籠町一丁目　横本
- 同 鍋町　清水嘉兵衛
- 日本橋區本町三丁目　庭花屋
- 芝區櫻田本郷町　鈴木新兵衛
- 同 南佐久間町　栗原
- 同 同　鈴木
- 赤坂區新町　赤川市兵衛
- 同 同　飯田
- 京橋區尾張町　鈴々木
- 同 出雲町　金盛堂
- 同　山田堂
- 本郷區天神町　牧進堂
- 神田區小川町　大塚雜誌店
- 同 錦町二丁目　眞故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃さも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

- 十冊　前金 五十八錢　府外 六拾三錢
- 廿六冊(半年)　同 一圓四十三錢　同 一圓五十六錢
- 五十二冊(一年)　同 二圓六十錢　同 二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

- 六冊　前金 三十五錢　府外 三十八錢
- 十三冊(半年)　同 七十三錢　同 七十八錢
- 廿六冊(一年)　同 一圓三十錢　同 一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

- 一行(廿七字詰)　一回　前金 拾錢
- 同　三回以上　一割引
- 同　六回以上　二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部 注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三